

本道

第
拾
參
號
卷

五
月
號

- 佛世尊を除て餘は能く救ふこと無けん
- 『教行信證』信卷講話 眞佛弟子釋
- 善もほしからず、また惡もおそれなし
- 佛智の不思議 「家庭問題と信仰」
- 歎異鈔 第十三章 「不得外現賢善精進之相、內懷虛假」

求道集拾參卷第參號目次

麻 生 介

▼佛世尊を除て餘は能く救ふこと無けん

▼善もはしからず、また惡もおそれなし

▲佛智の不思議 近角常觀
▼歎異鈔講義 近角常觀
第十三章（承前）

前號要目

▼勝鬘經を拜讀す

▼『教行信證』信卷講話 近角常觀

第十席 橫超釋

武田慧宏

▼慶讚錄

第十三章（承前）

▼歎異鈔講義

近角常觀

▼人生の轉換

『樂あり毒をこのむべからず』

近角常觀

其一

▼我が身の惡しさを苦にする人に

- 第一席 眞佛弟子釋
一、人生問題 二、私の行き詰つた所 三、生死流轉 四、業報といふこと 五、私が最後に思ふたことは 六、氣附かして貰ふたは唯ひと所 七、人を信じたのであつてはならぬ 八、横超斷四流 九、妙好人宗右衛門の話 一〇、業報の身が捨ておけねとて 一一、眞の佛弟子 一二、眞爲勘決 一三、眞の宗教、假の宗教 一四、聖人の信仰と三百八十餘人の人達 一五、法然聖人の教と釋人の信 一六、『選擇集』は樂の能書きでない 一七、『選擇集』の教化と聖人の『信卷』 一八、廣大勝解者

佛世尊を除て餘は能く救ふこと無けん

此一語は阿闍世王が大煩悶に陥りたるとき、其父頻婆沙羅王が空中より我子に與へたる訓誡である。實に味深き言である。千古動かざる眞理である。此語は今や我國の何れの方面に向ても、中心より親切を以て勧めたい言である。又嘗て此語を以て剝切に國家のために念じたこともあつた。猶現に我自身が此訓誡の事實であることを経験し來りたことである。

今や我國の何れの部分も行きつまりてある。此際に於て我等が深く耳を傾けねばならぬことは、佛世尊を除て餘は能く救ふことなけんといふことである。特に現時日本の青年は最も同情すべき地位にあるのである。大に修養もして居る、されど安心が出來ぬのである。大に理想も抱て居る、されど實現することが出來ぬのである。大に知識も持て居る、されど如何に働くか

すべきかを知らぬのである。大に努力奮鬥も爲て居るされど其效がないのである。而して最も同情すべきは道徳律法のために拘束されて、真正の自覺に接するとの出來ぬことである。煩悶懊惱に陥りて、未だ絶対の光明に浴することの出來ぬことである。

今や我國に於ては心あるものは信仰を叫んで居る、されど其信仰が果して如何なるものたるかを知るものはない、如何なるものを信すべきかに苦しんで居る。信するといふは全體に如何にすることか分からぬのである。國法學者も根本を信仰に置かねばならぬといふことまでは氣が附いてある、されど其信仰の根本を何れに置くべきかと不明である。國家の根本と宗教の本體とを同一物に爲ならば、頗る都合よき様に考へられる。そこで古神道と名づけられたる新神道が盛に唱説せら

るゝのである。我等は如何にも眞面目なる態度や、其

まごゝろの程も察せられて尊くも感ぜらるゝのである。されど其結果は畢竟妥協に過ぎないのである。國家の根本に向て宗教的色彩や、情緒的渴仰を以て着色されたいといふに過ぎずして、根本的に救はるゝといふことがないのである。妥協を以て一時を飾ることは出来ても、根本が救濟されないのである。否妥協を以て成立したるものには必ず一面には矛盾撞着が來るのである。若し國家の根本が即宗教の本體なりと妥協して居る間はよけれども、我は宗教の本體を信ずれども、國家の根本を信仰せずといふものを生じたならば、毛を吹て疵を求むる結果となるのである。隨分從來ありがちなる國體と宗教との衝突の如きは、寧ろ宗教の側に於て、宗教の本體と國家の根本と撞着するが如く考へた結果である。若し宗教の根本に於て統轄支配といふ思想を有するならば、必ず其點に於て矛盾を生ずるのである。是我國の國家宗教の關係に於て、將來深く

ない。又燈火と天井と撞着する筈はない。宗教にして國家と撞着するは、必ず燈火が天井の位置を犯さんとするからである、是一歩も許すべからざる點である。國家を以て宗教を説かんとするは、天井が燈火の仕事をせんとするのである、是は不可能の事である。燈火を除て餘は闇を破ることはないのである。室に燈なければならぬ如く、世に佛ましまして我等が無明長夜を照したまひてこそ、初めて罪惡も自覺し、君恩國恩の偉大なることも分かるのである。如來は唯一の救濟であるといふことが、決して國家に撞着することではない。唯一の救濟に接してこそ信心の智眼が開きて君恩國恩の廣大なることを自覺せしめらるゝのである。一向專修の信仰が、國家に撞着するものでなくして、却て此信仰こそ人心の無明を破りて、國家民人の救濟を持ち來たさるゝ次第である。

抑々一向專修の信仰といへば、一見頗る偏狹なる態度の如く感じ安いが決してさうではない。勿論佛世尊

考へねばならぬ點である。

佛世尊を除て餘は能く救ふこと無けんといふは、如何にも能く如來の救濟を盡くしてあるのである。如來は無明長夜の燈炬である、人生救濟の光明である。我等は此智慧の光明に接して、初めて光曉を蒙るのである。信心の眼が開くのである。人生が分かるのである、度大勝解者となるのである。そこで上下の秩序も分かかるのである。他人との關係も分かるのである。たゞへば暗黒なる一室も、電燈一たび閃きて天井の高きも分かるのである。牀の卑きも知らるゝのである。戸障子家具夫々の位置も分かれば、他人と衝突すべからざることも分かるのである。聖德太子の篤敬三寶と教へたまふのは、世の光明である、人生の燈火である。一たび此光明に接すれば、君は天たり、臣は地たりといふ秩序が明らかになり上下の禮も分かるのである。各人の道徳も人倫も、皆各踐むべき道が明らかになるのである。燈火と天井とを一つにせねばならぬといふことも

を除いて、餘は能く救ふことが出來ぬといふのであるから、佛世尊が唯一の救濟であることは疑ふ餘地はない。何故といふに先づ第一我等自身が闇黒であるから自ら救ふことが出來ぬのである。我等自身が罪惡であるから、自ら清めることが出來ぬのである。而してたとひ、かく行すれば罪惡を消滅すべし、かく修すれば闇黒を去ることを得べしといふ教ありとするも、之を修することも、行することも出來ぬのであるから、とても救はるゝことが出來ぬのである。一向專修の根源は他を否定することではない、拒絶することではない。何れの行も及び難き身なれば地獄は必定すみかぞなしも弱きと退くべからず、彼等は理想を蹂躪して進むべく、あま罵るべからず、彼等は理想を蹂躪して進むべく、あまり臆病であるのである。況んや微細なる點にまで氣を配ばかり、實行しても〳〵まだ足らぬ〳〵とばかり感ず

るのである。龍樹菩薩の言を以て云へば、憚弱怯劣の菩薩である。自力の修行は難行道である、法然聖人も親鸞聖人も皆此一點に於て苦まれたのである。實に現代青年の深憂は是である。兎角戒律とか修行とか宗教的言語であるから了解に苦むのであるが、畢竟するに修養とか、理想とか、努力とか、奮闘とか、生きたいとか、徹底したいとかあせるまでが皆自力である、難行道である。如何にするとも及び難いのである。其結果は煩悶である、懊惱である、狂亂である。實に現代青年の心ほど同情すべきものはない。

併氣強くも思ひ切りて此際に於て現代青年に告げ知らることは唯一である。汝の望むところは無効である、出來得ないのである。恰も不具者が完全なる人になりたいとあせる様なものである。危篤の病人が本復したいと慟哭する様なものである。可愛想であるが出來ない望みである。親としては出來得るものなれば完全なる人としてやりたいのである、本復させてやりたいの

の下に報るあらはれたまひし如來なればこそ、報身如來と名づけたてまつるのである。此の如く我等は自己の力としては、自己のはからひとしては、一分も一厘も何れの行も及びがたき火宅無常の人生、煩惱具足の我身なれど、此の如く抱迄も見捨てたまはぬ無量壽無量光の大悲の親の御心が、我等の心の底まで到りて下さるのである。真心徹到である、光明徹照である。此佛世尊を除き餘は能く救ふものなけんといふのである。此如來ならずんば能く救はることないのである。大乗は二乘三乘あることなし、二つも三つもあるべからず涅槃經の一道清淨も、華嚴經の無碍道も、畢竟如來清淨本願の念佛一道の外はないのである。是が佛法根源の歸依佛、歸依法、歸依僧である。聖德太子の南無佛である。親鸞聖人の所謂念佛成佛是真宗であるのである。

涅槃經の中には阿闍世王のために、印度の六派哲學者が種々の法を説きて慰藉を與へんと試みつゝあるの

であるが、不可能である。併此の如き不具なる汝を見はなすにあらず、危篤なる汝を獨り去らしむるにあらず、汝の悲のあらむかぎり、共に悲み、汝の心細きかぎり、共に運命を同じうするのである。一面に於ては、氣強くも佛教は、罪惡無常の人生の如何ともすべからざること、又自力修行の無効なることを宣言すると共に、其罪惡のあらむかぎり、同情慈愛の光明を放ち、其無常の人生を救ふべく常樂清淨の世界を實現したまひたるのが佛陀である。如何に微細なる點までも行き渡らざることなき、盡十方無碍の御慈悲である。如何なる闇黒の底下までも到らざることなき、無邊無際の光明である。抑親鸞聖人の眞佛真土なるものは、佛は盡十方無碍光如來、土は亦無量光明士也である。報佛報土といふことは、大慈大悲より酬報實現し來りたる慈悲の塊、同情の結晶といふことである。此く不具者、危篤病人を如何なる點までも見捨てずして運命を同うし、境遇を共にして救はずんば止まじといふ本願である。されど畢竟無効である。何んとなれば畢竟理窟に過ぎないのである、氣休めに過ぎないのである。煩悶せなとすゝめるのである、氣をあせるなといふのである。現代の青年が、誰が好みて煩悶するものがあらうか。かくせよ、かくせなといふ訓諭の如く實行出来るものならば、何故何時までも苦しむものがあるものか。此の如き教訓律法は畢竟六師外道と何の選ぶ所もない。獨り耆婆に至りては煩悶せなとは言はないのである。獨り耆婆に至りては煩悶せなとは言はぬ、苦しむなとは言はぬ。王善かな善かな罪を作ると雖心に重悔を生して、而も慚愧を抱けり。苦しむも尤である、苦しむも無理ない事である。親鸞も此不審ありつるに唯圓坊同じこゝろにてありけりといふが、既に業に絶對同情の顯現である、耆婆が阿闍世王に同情するのが、既に佛の御心である。而して遂に阿闍世王が罪を犯して殺したる父頻婆沙羅王が告げて言はれたのが、惟願くは大王速かに佛の所に往づべし、佛世尊を除て餘は能く救ふことなけん、我今汝を愍むがゆゑに相勸

て導くなりと申されたのである。親鸞聖人が此涅槃經の文の前に、九十五種皆汚世、唯佛一道唯清閑といふ文字を引かれたのも、畢竟此意に外ならぬのである。其清閑なる唯佛一道は、愚癡親鸞の如き愛欲の廣海に沈

み、名利の大山に迷惑するものを飽までも見捨てたまはぬ如來清淨本願である。難化難治の穢惡濁世の我等を矜哀憐憫したまふ、大悲弘誓の醍醐の妙薬であるとすゝめたまふのである。

善もほしからず、また惡もおそれなし

現代青年の苦とするところは、高遠なる理想を追うて手の達せざる所にあり。高潔なる生活を求めて自ら處する能はざるにあり。かくの如くして時々刻々善を得んと欲し、惡を去らむとするのである。而して遂に至善を攫むあたはず、罪惡を清むるあたはず、進むも退くも道なきに至るのである。聖人親鸞のたまはく、某は善もほしからず、まだ惡も恐なし、善のほしからざるは如來の本願にまされる善なきゆへに、惡の恐なじいふは如來の本願を妨くる惡なきがゆへにと。實

に現代青年に知らしたいのは此心持てある。徒に善をほしがるなどいふならば無理である、されど如來の本願といふ絶對の善があるゆへに、之に満足してほしがるなどいふのである。徒に惡を恐れるなどいふならば無理である、されど如來の本願を打消すほどの惡はなゆへに恐れるなどいふのである。無明の闇夜に彷徨する我等は、微かなる火でもほしいのである、漆黒なる暗を恐れるなどいふても恐ろしいのである。されど今彌陀の佛日は其闇夜を照すのである。日光の前に

は如何なる電燈もほしからずである、如何なる漆黒も日光を妨ぐること出來ぬのである。實に彌陀の佛日は絶對の恵みである、絶對の満足を與ふるのである、絶對に罪惡を打消すのである。

本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひとぞなき、功德の寶海みちくへて、煩惱の濁水へだてなし。如何にも此和讃は如來の本願の高大無邊なるを盡してある。

如來の本願は慈悲の源泉である、同情の淵源である。一たび此源泉と連絡したならば、空しくすぐるものは一人もない、何んとなれば如何なる點までも慈悲同情の及ばざる所ないのである。抑々善のほしいといふのは空虚があるからである。今此本願の滾々として盡きざる源泉に一たび遇ひぬれば、悉く其空虚を満たさるゝのである、満足せしめらるゝのである。子供が菓子をほしがるのは、口が十分満足して居らぬからである。又如何に濁水があろうか、汚濁であろうが、決して恐るゝには及ばぬのである、其上に／＼滾々として注ぎ來

る水のために、如何なる濁りも悉く洗ひ去らるゝのである、或人が心が虛しくなれないと歎きたことがある。如何にも虛心平氣になれないものである。併其上へ／＼と清らかなる水が來りたならば、其濁を隔てなくするのである、濁を留めぬのである。大海の中に流れ込めば決して濁を氣にするにも及ばず、清もほこるに足らぬのである。

彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水も、歸入しねればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる。如何にも廣大なる智慧海である。如來の大慈悲の前には如何なる善も善としての價値はないのである。如何なる惡も、惡としての罪過は消ゆるのである。成效せる子も親の前には其功をほこることは出來ぬのである。如何に失敗せるものも親の前には退けらるゝことはないのである。善いも悪いも所謂子供の喧嘩であつて、親の前に閉繆するときは、春風颶蕩面を拂ふて、唯慈光の間に嘻々するの外はないのである。實に善もほしからず、また

悪もおそれなしである。

聖人の仰せには、善惡の二つ總じても存知せざるなり、そのゆへは、如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほどに、しりとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ、おほせはさんらひしかと。實に首を回らせば善惡是非昨夢の如くてある。如來の御こゝろの前には頻りにほしがりたる善も瓦の如く、徒に恐れたる惡も張子の虎の如くてある。今まで珍寶として祕藏したる善も畢竟財物に過ぎなかつたのである。今まで敵として嫌ふたものも、つまらぬ誤解たることが分かつたのである。此味を轉するといふのである。轉するといふは惡をそのままおきて善になすことである、炭が火に遇へば炭火になり、水が日

光に照されて水となるごとくである。惡ばかりがとけるのではない、善もとけるのである。惡が水なれば善は雪である、善惡は炭の上に彩りたる色である。ゆめく善をよしとおもひ惡を嫌ふべきにあらず、如來本願海は善も惡も轉じて一味となすのである。

行卷に曰く、海と言ふは久遠より已來、凡聖修する所の雜修雜善の川水を轉じ、逆説闡提恒沙無明の海水を轉じて、本願大悲智慧眞實恒沙萬德の大寶海水となす之を海の如しと喻ふるなり、良に知んぬ、經に説て煩惱の氷解けて功德の水と成るが如しと。實に雜修雜善の川水も轉じ逆説闡提の濁水も轉ずるのである。雜行雜修をすてるといふが、すてねばならぬといふて、りきみてしてるのではない。水到りて舟浮び、日出で開去るごとくである。實にこれ善もほしからず、惡もおそれなき能令速満足、功德大寶海の人生生活である。

「教行信證」信卷講話

近角常觀

第十一席 真佛弟子 釋

一 人生問題

今席は眞の佛弟子釋からであります。けれども前席に於て、横超斷四流と、信の一念に於て私共の迷を断ち切らせて貰へることをお話した。その所が猶ほ色々の點より話させて貰ふことが出来るから、

初に今少し茲の所を喜ばして貰はうと思ひます。

横超斷四流とは、廣大のお慈悲が聞こえるなり、私共の長の迷ひの根本が断ち切られることがある。これは私共の實際喜ばして貰ふ上より最も有難い所で、眞の佛の思召が頂けるなり、善き惡しきに就きての、總ての私共の娑婆の思ひの根が断ち切られて仕舞ふのであります。

この事を先づ人生問題の上よりお話する。殊に昨夜

は談話會に於て私自身の経験をお話したのであります。が、總てこの人生上の問題は、それが道徳上より見て設令善であり惡であつても、この佛の御真意が聞こえる迄は、要するに皆な相對的たるを出てぬのであります。昨夜もお話をなのであります。第一私自身がお慈悲に氣をかせて貰ふ迄に色々考へた事にしても、私が子供の時より最も頭を悩ました問題は、この佛教といふことであつたのである。「佛教の爲めに盡されねばならぬ。」「佛教を振興せしめなければならぬ」と、隨分には佛教界の悪弊を改革しなければならぬ」と、隨分誠心誠意私としては力の限り骨折つた積りであつたのである。又自分の修養道德といふ上にしても、自分としては全身を捧げ、惡しきは飽迄自分が引き受け、善きは飽く迄人に與へ、何處迄も誠實に行ふことに於て

は、充分努めた積りであつたのである。けれどもその、然うして居つた事が、残らず皆な間違ひであつたといふ事になつて仕舞つたのであります。これは言ふ迄も無く、私共が道徳上より見て、これは眞に立派な遣り方と思はれる、如何なる事柄に就いても同やうに皆な言はれるのである。即ち私の場合は、私が斯く長い間佛教に骨折つたと思うて居つた事も、あとより考へれば畢竟一種の國家觀念の如きを以て、佛教に對して居つたに過ぎなかつたのである。即ち自分が佛教故この佛教の爲めには飽く迄盡さなければならぬと、即ち自分が眞に慈悲が有難くて、人に知らさうと骨折つたのでは無い。「自分が佛教の家に生れたから」と、佛教の爲めに骨折つたの故、即ち耶穌教の人が耶穌教のために働くから、佛教の者も佛教の爲めに一生懸命にならなければならぬといふ立場である。詰まる處は何もかもが、この我が佛尊して遣つて居つたに外ならなかつたのである。故に遣りつゝも私としては其間に於て、「自分は何處迄も善く遣つて居る」との念が如何にして離れ難い。故に夫れ程一方に眞面目に遣りつゝも——又私としては實際眞面目にも遣つた積りであ

る——遣れば遣る丈け遣らぬ人を見ると、終に不足の念が起つて來たといふことになつたのであります。

二 私の行き詰つた所

それも初めの間にありては、「なに人が遣らなくても、自分さへ眞面目に遣つて居ればよい。人が自分に悪しく仕やうとも、自分の方から何處迄も善くして行けば、結局人も善くなるのだから」と、見るもの聞くことに對し、當初は總てこの陣立てやつて居つたのである。處が人間には最後になると行き詰るといふことがある。其の最後に行くと、人間の本性が遺憾なく現はれて来る。それで私は斯く眞面目に／＼にと、遣つた中に、どうぞ最後に行きつまつたのである。その爲め自分の身も心も疲れ切つて、彌々多年間法の爲めに眞面目に／＼に考へた、其の最後に至つて私の行き詰つた事は、「自分はこれ程眞面目に遣つて居る、爾るに他を考えると何うも人は眞面目に遣つて居無い」。茲は私は思ふさま懺悔さして貰ひます。「自分は現に是れ通り、この爲めに身心惱亂の苦しみに陥入つて、悶絶して居るのである。此の法の爲めには自分は

生きてる生命迄も惜しく無いと、投げ出して遣つて來たのである。夫れにも係はらず世の中は、眞面目々々々と言つてゐるけれども、彌々本氣に眞面目に遣つとする者とては一人も無い。之はをかしなものである。斯うだとすると、世の中は實に強い者勝ちである。自分の如く眞面目で遣つとる者は、遣れば遣る丈け人の下敷き、埋め草となつて仕まふばかりである。世の中はこれは如何にも變なものである」と、この疑ひに行き詰つたのであります。何故こんな疑ひが出て來るか。人間は實にひどい者で、自分の立場の有る限りは人に善くし、忠實に考へることも出來るのであるけれども、肝腎の自分が立てぬとなつて來ると、今迄「法の爲めである」「正義の爲めである」と言つて居つたことが、實は皆な自分を本としてやつて居つた仕事である。故に一度び自分が成立たぬとなつて來ると、あれも可かぬ是れも可かぬとなりて、之が本となつて人生總てがいけなくなつて來るのであります。そして一度び斯うなつて來ると、如何なるものも世の中に一として善いものとては無くなつて來る。「甲の友人も可かぬ、乙の男も變である、誰も彼も」といふ具合になりて、前

は道徳上宗教上、極められる丈け理想を高く持つて遣つて居つた積りである。處が斯く彌々可かぬとなつて見ると、今度はそれ丈け裏が来て、普通の人よりも一倍疑ひが深くなる。終には道行く人迄が「あれは皆な嘘をやつて居るのである」と、此の疑ひの心が段々四方八面に一杯になり「自分も可かぬ、人も可かぬ」と、唯々聞え苦しむ外になつて來たのである。この事は自分で経験して來た事故、私には能く分る。恐らく理想的の青年の方の中には、必ず茲に行き惱んで居らるゝ方が少くなからうと思ふのであります。理想的の青年の方は、凡て理想を持ちて此世に立たうとして居らるゝのである。それであるから、自分の理想に合はぬと、如何なることでも皆な可かぬとなる。第一理想に合はぬやうな事を、仕て居る自分自身が可かぬとなる。すると「自分のやうな悪いことは可かぬ」と、之が最後の問題となつて來るのであります。

三 生死流轉

そこで私にする時は、今迄人が如何に自分に悪しく向つて來やうとも、自分の方よりは飽く迄憎まず、悪

しくせぬと思うて遣つて來たのである。處が今斯く實際に於て、人が自分のやつて居ることを察して呉れぬとなると斯く迄不足が出て來るといふは、こは矢張り今迄のが人相手で遣つて居つたのであるからである。人に褒められ度い爲めに遣つて居つたのである。と斯く段々氣が附いて見ると、自分が本當に佛教の爲め身を捨てても不足が無いならば、こんな事は無い筈である。それにこの不足の出て來るといふは、こは畢竟今迄のが、「自分は身を捨てる／＼」と言ひつゝ、實は自分が法の爲め宗教の爲め盡くして居ると、之を人が見て呉れるといふ心でやつて居つたのである。この人が見て呉れぬとなると、如何にしても満足が出來ぬ心故、これは今迄の事が、人に善く言はれ度い爲めに、遣つて居つたより外無つたのである、と斯いふ事になつてしまつたのである。するとこれ迄立て通して來た處の理想が、反対に茲で目茶々々に碎けて仕まひ、最早や何うしても再び立たれなくなつて仕まつたのであります。さて之を私は何故言うか、世の中は善い方であつても、惡い方であつても、人生は總て生死流轉であつて、善きことをすれば、その善きことをするものが迷

ひの種となつて行くのである。又惡しき方になれば「自分は悪い、こんな悪い心が自分に在るとは、人は思う」とは、人は思うて居なかつたらう。「も一つ行けば『彼奴は何んだか自分の顔を見て、妙な顔をした、屹度自分が無い』」と。終には「こんなことなら、生きて居たつてやうが無い。若し石が地に落つる如く、自然に死ぬことが出来るものなら、一層死んだ方が樂である」と、斯ういふ迷ひに墮ち込んで行つたのである。即ちこの私の高きと低きとの迷ひである。即ち善き事をすれば善き事で執着がついて來、惡しき方になれば惡しき事で執着がついて來る。即ち之が私共の生死流轉の様なのである。即ち私共は之で今日も明日もと暮していくから、一年でも二年でも之を續けてゆく外なくなつて居るのである。終に生をかへ、世を換へて、次の生迄も之で迷つてゆく。これが私共の轉生死の様である。業報に縛られて苦しんで居る様なのであります。

四 業報といふこと

さてすれば、何うしたらば之を断ち切ることが出来るのであらうか。長い間初めは自分が悪いと思うてその爲めに苦勞し、後には自分が悪いと言つて、爲めに悔んで居るのである。斯く善ければ善きに就け、悪しければ惡しさに就け、何處迄も人と五分々々が起りて、隔て心を來たし苦しみをする。堪へられ無いから断てるもののなら何としてでも断ち切り度いのであるが如何にしてもこれが断ち切ることが出来ぬのである。自分の方から先き五分々々を止めれば、人も止めるとは思ふけれども、その自分の方から先き止める事が如何にしても出来ぬ。人さへ止めて呉れば自分の方も止まらうとは思ふけれども、人が止めて呉れぬから、五分も止まりやうが無いとなる。即ち斯くいつ迄も人と不仲で居るは、つまらぬとは分つて居た。分りながらも如何にして止められ無つたのが、之が私の苦みであつたのであります。故に私は之が前世の業報であると言ふ。業報といふ言葉は、佛教の上では、これも業報である、あれも過去世の因縁であると、何んとなく一

種の運命主義の如く聞え易いのである。けれども業報とは、この五分々々の考が何處迄も附き纏ひて之から離れられぬ處が業報であるのである。即ち私にする時は、この五分々々で、何時迄も苦しみより出られなんだ有様が、恐ろしき業報の姿であると思ふのであります。で業報は必ずしも道徳的に悪いことばかりが業報と限ら無い。彼の人にこれ／＼の恩を受けたから、之を返さんならぬと考へるのも、矢張り業報にまとはれて居るものなのである。即ち彼の人にこれ／＼の大恩があるから、義理上恩返へしを仕なければならぬといふ、義理の業報に纏はれて居るのである。極端に言ふと、途上に於て人が瞰らんだ、「彼奴めんな」ともう夫が忘れられぬ處が即ち私共の業報なのである。故に業報のものは極めて些細な事柄から始まるのである。設へば道で人に遇ひ妙な顔付きて自分を見られたとする。すると「彼奴めんな」と、極めて僅かの事柄なれども、夫から夫へと段々に尾鱗がつき、仕舞ひには夫が持ちもかつぎもならぬやうになつて來るのが、業報の様なのである。恰も手毬程の雪の塊であつたのが、それを轉じ／＼仕て居る中に、終に大きくな

雪達磨となつて仕まふ具合ひなのがあります。このことは私など非常に邪推深く、大にやつたから能く分る。仕舞ひには私など、さういふ具合ひに飽く迄持つて廻はり、邪推深く考へる自分がいかぬのであることを能く分つて居たのである。可かぬと知つたけれども、如何にしてもそれを取り去ることが出来ぬ。此の點に私は大に苦しんだのである。私など善いも悪いも、皆な自分が可かぬのであること迄は能く分つて居たのである。分かつたけれども、その可かぬことが如何にしても止まら無い。故にその止まぬのが自分が可かぬと、この點一つに大に苦しんだのであつたのであります。

五 私が最後に思ふたことは

處で茲で言はぬならぬのは、平素佛教を聽いた者に於ては、佛の思召を聞き、信仰が獲られると、その業報が切れ安心が出来るのであらうとの、或種の豫想が茲に附いて来る。之がある間はいつ迄経つても可かぬのであります。即ち斯うやつて居る中には、いつか分るだらうと、即ち問題がいつかは／＼になるから、之で

は何時迄たちても可かぬのである。處が之では忽にして間に合は無くなつて来る。現に私などこれ迄信仰をもと、十年廿年これまでやつて来て、それが終に斯く駄目になつて仕まつたのである。故に能く世の中に「自分の信仰はもうこれ九分通り迄は本當にいつて居る、もう茲で最後の感激さへ一つ興へられば」と、斯ういふ風に思うて居る人が隨分ある。そんなことを思うて居るのが、それが皆な駄目なのである。之は九分迄親鸞聖人の真筆に違はぬと思うても、あと一分怪しかつたらもうその物がいかぬのであります。故に私共は自分に安心が出来るだらうとの思ひが残つて居る間は、如何なることありても安心することは出來ぬ。そこで私として思ひましたことは、「自分は長い間信仰々々と言ひて來て、それで斯く行き詰まつて仕まつたのである。今迄是れ丈け信仰ぢや安心ぢやと言うて來て、それで斯くいかぬやうになつたのであるから、今後どれだけ造つたにした處が、もうこの道では駄目である、佛の慈悲も自分には間に合はぬ。唯心に朦朧ながらも思ふたことは「自分ぢやとて長い間佛教ぢや宗教ぢやと、骨折つたのも決して事惡しかれと思うてやつたの

では無つたのである。けれども結局斯ういふ具合にそれが皆な駄目となつて見れば、最早や一點の取り得も無き自分である。その自分を決して善いと人から言うて欲しくは無い。又今となりて見れば人生的に成功を望まうとも自分は思はぬ。寧ろ死んで仕まひ度い位である故、生命を惜しいとは決して思はぬのであるけれど、唯一の何うにも死ぬにも死なれぬ處の憾みがある。夫れは斯く冷かな、光りの無い人生、強い者勝ちの人生に、自分は人の下敷きとなりて死んで仕舞ふのであるとしてみると、これでは如何しても世の中が成立ぬ。あゝ誰かありて自分が斯のやうなことで苦勞を仕て居る心中を察して呉れて、「哀はれ可哀相である」との一言を懸けて呉るゝ者は有るまいか。若しありてこの苦しい胸中を一點見て呉るゝ人さへありさへすれば、もうそれで自分は仆れても充分である、決して命を惜しいとは思はぬのであるけれども、この仕て見やうの無い自分の衷心を、人生に於て誰でもよい、たつた一言——それも決して自分をよいと言ひて貰ふことは入らぬ。寧ろ悪いと叱つて貰ふてよけれども、お前のお前の然ういふやうになつた處が如何にも可哀相で

ある、お前にしてみれば然うなつてゆくのが如何にも無理が無い。故に自分はお前が如何に悪しからうとも、その悪しきが如何にも哀はれてならぬの故、自分丈けは飽く迄見てやるぞ。何んな事あつても決して捨てはせぬぞ」と、もう茲の一言である。この一言が私は欲しくて／＼ならなかつたのであります。そして私はそれを何處に目を着けたかといふに、今言ふ如くに私は第一佛を振り捨てゝ居たのである。多年佛教ぢや信仰ぢやで遣つて／＼遣り抜いて、其舉句に斯ういふ風になつたのであるから、佛教では最早や安心は出來ぬとなつて居たのである。故に何處ぞにそのやうな友人はあるまいか、同情者は有るまいかと、私は之を人生に求め廻はつたのであります。

六 氣附かして貰うたは唯 ひと所

そこで先生の處へ行つて之を聞いて見る。先生の言はれることでも安心は着き兼ねる。枕頭にお聖教はある、讀んで見ても一向分らない。大經五惡段を讀んで見ても、悪いのが可かぬとのことが書いてある丈けの

ことで、思ふやうの事は一つも書いて無い。これで私は半年の間悩みに悩んだのである。そしてとうど最後迄私は、然ういふ親切な言葉は聞かれ無いで仕まつたのである。そこになると私は、全く誰からも聞かして貰ふ機会無くて、苦しみに苦しんだのであります。處が之が平日御聖教を頂かして貰うて居たおかげ、善知識の御教化を蒙つたお蔭でありまするが、或日ふと病院からの歸り道に氣附かして貰ふたのである。それはふと何氣なく佛の廣大の御呼び聲に思ひ至つた時、今更の如くにその廣大の思召であることが有難くなり、其の時「あゝ今迄長い間、この善く出來無い者が哀はれ、可哀相に思ふぞとの同情の言葉が欲しくて／＼ならなかつたのであるが、佛が惡しきを捨てぬとの仰せは、實に此の廣大の御同情のお言葉であつたのであつたか」と、唯これ一所であつたのである。私はそこに氣附かして貰ふなり「あゝ今日迄佛迄を無きものに仕て、一點の光り無き、石、瓦、炭團、鐵、土塊の自分であると思つて居たのであるが、その私の其の心中迄を見て下され、その汝が如何にも可哀相である、心の中の淋しさは、察するぞ、その汝の爲め現はれた我で

あるからは、何處々々迄も、我は捨てはせぬぞと、仰しやつて、下された佛であつたのかと、もう茲一所であつたのであります。それが自然に自分の上に分つて來たもの故、さあ私は有難くて／＼仕やうが無い。「我が心を夫れ程迄に先き佛の方より知召して、仰しつて來たもの故、さあ私は有難くて／＼仕やうが無い」。我が心を夫れ程迄に先き佛の方より知召して、仰しつて來たもの故、さあ私は有難くて／＼仕やうが無い。「我が心を夫れ程迄に先き佛の方より知召して、仰しつて來たもの故、さあ私は有難くて／＼仕やうが無い」。慈悲の難有さよ」と、斯くこの時初めて知らせて貰ふなり、私は思ひ懸けなく今迄の人生が、茲ですつぱり皆な断ち截れて仕まつたのである。即ち「我が心の奥底迄を同情し哀はれと言つて下さるは、もう此の佛ばかりであつたのである。之でなくては安心の出來やうによりて求めやうと仕て居たのであつた。この我が心の悪しくて仕やうが無い、そこを飽く迄見て下さるは、もうこの佛を外にして無つたものを、それを何處迄も持つて行き、人か見て呉れぬ／＼と、不足言うて居たは、實に我ながら呆れた奴であつたわい」と、斯ういふことになつてしまつたのであります。それで茲は私極端に言ふが、それ迄といふものは私は、親しい友人に對してなど、親しければ親しき程よけ不足に思へ

てなら無つたのである。處がこの一念に私は今迄斷金の交はりをして居た友、殊に宗教上の事に就けても終始事を共にして居た友、その友をも一方に於てすづぱり離すことが出来るやうになつたのであります。夫れ迄といふものは、私は何んだか、飽く迄事を共にする考へて、中途で盟^{ちか}ひを破られたやうの心地がして、その友が憎く／＼仕やうが無つた。そして斯く憎くむ裏には、何とかしてその友を無理にも引止めて置き度きやうの心地がしてならなかつたのである。斯くいふは多年の盟友秦君が、こんな宗教界はと見切りをつけ、宗教界を棄て、去つたのであります。故に私にすれば夫れ迄、外の者は設へ何うでも、自分等二人はと、思つて來たのが、思ひ懸けなく一人ボツチにされて仕まつたのである。故に私はどうぞそれが本になりて、甲の友人も變てある、乙も可かねと、終に總てが駄目になります。彌々前記の苦しみに陷入つたのであつたのであります。

七 人を信じたのであつて はならぬ

そこで茲は私は露骨に言ふ。皆さんが法を聽かれるにしても、私なるものを頼りに仕て居られるのでは駄目なのである。勿論彌々お慈悲の頂ける迄は、私を頼りに聞いて下さる外仕やうは無いのであるけれども、何時迄も私を頼りに仕てお出でになるのでは、必ず遣りぞこなひが来るとの事を申上げて置き度いのである。それは本來私共は疑ひの人間故、心の底には必ず淺間しい根性がある。故に私の身を見て、下さるのであると、必ず突き當る時節が來るとの事を申し上げて置き度いのであります。之は必ずしも私ばかりに限らぬ。人間は自分の子や親に對しても、同やうに悪しく思へるのである。故に『選擇集』に於ては「父母孝養を以ても往生の業とせぬ、奉事師長を以ても往生の業とせぬぞ」とお示し下された。又『歎異鈔』に於て親鸞は父母孝養のためとて、念佛一遍にても申したることいまださふらはず。

とあるのも、私共は出來る孝養をせぬといふのでは無い。さういふ私共であるから、仕度いにも父母孝養が出來ぬのである。爾るに斯く仰せられた親鸞聖人が第

ほかに別の仔細なきなり」であります。

親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまゐらずべしと、よき人の仰せをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり。

善き人法然聖人の仰せであるから、彌陀の本願が信ぜられたかと思ふと、なに全く逆さまである。聖人の説かれる彌陀の本願が信ぜられたから、法然聖人が信ぜられるとなつて來たのである。聖人の人格や、人となりが難いから法然聖人を信じて行く、といふのでは『歎異鈔』は、一文の值打ちも無くなつて仕舞ふのであります。然うでは無い。私共は、今言ふ如く孝養父母も出來ぬのである、奉事師長も出來るなら爲るが、虚偽難毒のこの心ては如何にしたつてすることが出來ぬ。爾るにその出來ざる仕て見やうなき様を哀はれみて、その者をこそ捨て置けぬとある南無阿彌陀佛の仰せである。して見ると私共においては唯もうこの南無阿彌陀佛ばかりが難い。してその南無阿彌陀佛を知らせ下されたが、吾が聖人にする時は、即ちよき人法然聖人の仰せてある。すれば廣大なる本願の思召が其の儘法然聖人の口に現はれて、即ち彌陀の直説である。即ちこの頂いた上からの「よき人の仰せを蒙りて信する

ほかに別の仔細なきなり」であります。

さて今席は計らず、今の友人の名前迄言うて仕舞へば私として此上なく難有く思はして頂くのであります。それ程多年事を共にして居た友人を、私の方よりは斯く迄惡しく隔てたに係はらず、その友人の方では更に悪しく思ふて呉れ無つた。けれども私が思ひがけなく信仰に入らして貰ふた爲め、その友人はびつくりして、彌々俺は宗教界は駄目と、益々遠かるといふ風になつて居たのである。處が今春其の友人は思ひ懸けなく愛兒に先き立たれて、悲みの餘り切端つまり、その爲めに不思議にも亦、このお見捨て無き御眞實一つを頂いて呉れたといふ事になつて來たのである。即ち私としては多年事を共にして居た親友と十幾年振りに今度は彌々精神的に再會するを得たといふ譯である。斯く年少の頃より宗教の事につき相携へてやらして貰ふた親友と、今度は精神的に相結ばせて貰ふを得たといふは、何から何迄不可思議の御導きであることを思はして貰ふ次第であります。

八 橫超斷四流

そこで以上は私の苦しみた道行きに就き申述べたのである。斯く茲に來ると、人間はどんな淺間しい心でも起して來るのである。そこになると彼の監獄の囚人が造ることを、場合によれば必ず造るに決つてるのである。唯然うなる業報が現存せぬから造らぬ迄の事で業報さへあれば、何時でも然うなれるやうに、私共は皆ななつて居るのであります。處で今言ふ如く、それが彌々最後に押し詰めて來ると、その人を不足に思ひ、悪しく考へる五分々々根性が如何にしても止まらぬ。止まぬとすると自分の身は成立たず何とも仕やうが無い。その仕やうが無い私の心中を、今横超の直道といふことは、即ち横合より親切な人が飛んで出て「その疑ひ、苦むは如何にも汝の身に在りては無理が無い、如何にも我は同情する。故に如何程悪しくとも我は汝を悪いとは思はぬぞ、如何程我を隔てやうとも、我は決して不足とは思はぬぞ。そちらが五分々々で遣るならば、我は何處迄も無碍の心で向つてやる。そちらが三毒でやるならば、我は飽く迄も、欲覺瞞覺害覺を生ぜず、欲想瞞想害想を起さず、色聲香味觸の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、

少欲知足にして染恚癡無し、三昧常寂にして智慧無碍なり。虛偽詭曲の心有ること無し、和顏愛語にして意を先にして承問す。(天無量壽經)

と、斯く飽く迄も私の仕て見やうなき心中に向つて、何處迄も之を融かさな措かぬとの慈悲心を以て、この廣大な眞實で向ふて下さるが、之が佛の本願といふことなのである。又そのお心が佛の無碍光といふことなのであります。そこでこの廣大の御眞實で向はれるのであればこそ、如何な五分々々の私も、この御眞實の前には自ら頭が下り、満足して、ハタからばたゝ、煩惱の根が断たれて仕舞ふとなるのである。即ち今迄は「人が善く仕て呉れるから斯うせねばならぬ」「あーすれば人が恨むから斯く」と、何處迄も之で惱むより仕方が無つたのである。其の者が一度び、その爲めにこの造る瀬無き御親切てあることに腹ふくれて見ると、「今迄自分の出来もせぬ事を、斯うもあーもと、あせつて居つたのが恐ろしき自分の中違ひであつた」との事が分つて來る。此の間も或方が親に孝行するに、何程心を運んでも親が満足して呉れ無いとの事を歎かれた。私は申したに「貴方は親に孝行が出来ると思う

て居らるゝか。何れ丈け骨折りても、親が満足仕て呉れぬ處が、人生の業報といふ事なのである。爾るにこの不完全の故に、永劫に歎きが止ま無いとの事を哀はれみ思召され、察するぞ、見捨てぬとの仰せが即ち父母孝養を以つては往生の業とせぬとある廣大のお慈悲にてましますのである。即ち自分で仕度くも、仕度い親孝行がする事が出来ぬ。其の出来ぬ心の中を私は見て居るぞ、その故に私は出て來たのであるぞ」との廣大のお慈悲でましますのである。すれば今日迄出来ると思ひ、親孝行で立てると思うて居たのが身の程知らずの間違ひであつたのである。斯く孝行一つ出来ざる申譯け無き奴の爲めに、斯程迄の廣大の思召とはと、玆で人生の總てが斷てるのである」とのことを申したのであつたのであります。玆になると「斯うせねばならぬ」との事が、人生に一として無くなつて来る。今迄人に不足を言ひ、自分が善く出来ると思うて居つたも、皆自分の間違ひであつたことが能く分つて来る。即ち斯くあれもこれも、この不思議の佛意に腹胀るゝ一念、總てが断ち切れる處が、横超斷四流なのであります。玆になると、今迄の五分々々を思ひ懸けなき

お慈悲の爲め断れて仕舞ふのであるから、最早や五分々々が續けられなくなつて来る。善いも悪いも全體が皆な申譯けなき誤りであつたとなつて来るのである。すると人間の義理迄離れて仕まふのである。如く思ふは間違ひであるけれども、これ迄最も心を悩ませた善し悪しの計らひが切れて、「斯うせんならぬ」「あーせんならぬ」の問題が無くなつて来るのである。して「この何一つ當てにならぬ、自分も人も當てにならぬ、この頼り無き心中を知し召し、そこが哀はれとのお慈悲でましませしかと、この一念に圓融圓滿順極順速と、殘る剛る無く胸一杯にお慈悲が満ち渡り、今迄の苦が轉じて喜びと變はりて仕まふのである。而して「自分は徹頭徹尾罪惡の者、爾るに此の者を飽く迄見捨て無き廣大の思召とは」と、もうこのお慈悲一つにされて仕まふのであります。そこで玆を『歎異鈔』の十四章には、

彌陀の光明にてらされまいらするゆへに、一念發起するとき金剛の信心をたまはりねれば、すてに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終すれば、即ちその時を以て、人生五分々々の生命は終るのである。

る。即ち前席にて申した「前念命終後念即生」の味ひである。即ち斯く一念の時此の世の命終るのである故に……もろくの煩惱惡障を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。玆をお知らせ下されたに外ならぬのであります。

九 妙好人宗右工門の話

處で此事は一體青年の方には分り易い。が老人の方でも實際問題の上から味はつて下さると能く分る。老人でも家庭に於てなど、隨分苦勞があるのだから、その上より聞いて下さると能く分るのである。苦勞の段に於ては、青年老人の變はりは無いのであります。そこで今私が『歎異鈔』の十三章にお知らせ下さる善惡の業報とのことは、如何にも私の善惡の業報である。爾るにこの者を飽く迄捨てぬとの本願一つで安心さて貰ふのであることは、先き程より申した人生問題で聞いて下さると能く分る。併し玆にも一つ妙好人の話で、私の常に喜ぶ話があるから、夫れをま一つ聞いて貰はうと思ひます。

それは定めて御承知でもあらうが、昔越後の新井附

近に宗右衛門なる非常に難有い信者があつた。これがまことに感心な人で、其處へ信濃の飯山なる山本幸右衛門——屋號を道具屋といふ。唯今の當主は幸吉氏と申して、この幸右衛門なる人の孫に當る方である。私はこの話は先年幸吉氏方に參つて、幸右衛門より直接聞かれたといふ、幸吉氏の母堂より直き／＼承はつたのであります。でその幸右衛門なる人が、始終この宗右衛門の處へ聽きに行つて、一緒に法を喜んで居られた。すると或時一人の二十四輩巡禮が宗右衛門方に出来て來て、何うか一晩泊めて費ひ度いと頼み込んだ。其の夜は宗右衛門幸右衛門と巡禮と三人、晩く迄爐の畔で、色々お慈悲を話し合つて、その晩は大層喜んで眠りに入つた。さて翌朝夜明け方に巡禮は目を醒すと、すぐ傍の壁の處に宗右衛門の一張羅の着物が掛けてある。巡禮は見るなりふと溢む考が起つて、手早く之を寝袋の中に疊み込み、皆んなの起き出でぬ先きに、何氣なき様で出て行つてしまふた。すると宗右衛門は目が醒めて見ると、もう巡禮は居無い。着物を浴まれたことは氣も附かぬで、「さて／＼寢過して朝飯も喰べさせぬで立たせて仕まふて残念だ」と、然う言ひつゝ、

そこらを見廻はすと、巡禮の烟草入が落ちてある。「あ、烟草入れを忘れて行つた。定めて不自由することであらう。一つ追つ驅けて持つて行つてやらう」と、早速跡追うて出て見ると、巡禮はもうその邊に居る氣合ひも無い。段々跡追うて行くと、漸くのことと遙か向ふの田圃の間に巡禮の後姿が見つかつた。そこで「あうい／＼」と聲の限り呼びかけると、何うした事か巡禮は、聲かけばかける程、後を振り反り／＼足を早めて遁げて行く。此方は諱けが分らぬから、益々追ひ行きて頻に呼び止める。巡禮の方は呼ばれゝば呼ぶるゝ程一日散に遁げてゆく。とうど川の渡し場でせかれたものだから、仕方なく巡禮は止つた。そこで宗右衛門は追ひついて、朝飯も喰べせぬで立たせたことを断り言ひ、「さてこの烟草入れをお前が忘れて行つたから持つて來た。さア持つて行け」と言つて烟草入を差出した。するとその時巡禮は眞赤な顔をして俯いて仕まひ、宗右衛門に對して、一言もよう物を言はぬ。とうどこたへ切れ無くなつて、笈の中より彼の着物を出し、「實は貴方の宅を立つ時、つい出來心でこの着物を持つて來た、何うかこらえて下され」とて、ひた謝りに謝つ

た。すると此の時宗右衛門、この着物を一目見るなり忽ち深く感じたる様であつたが、「あー然うであつたか。それはどうも前世に於てお前に借りて置いたに違ひ無い。定めて長いこと借りて居た事であらう。」とつと袂を探りて一步銀を取り出し、その着物の上に載せ、「之は僅ばかりであるが利息である。何うか一緒に取つて置いて呉れ」と言つて差出した。巡禮の方は取つた上に利息迄遣らうといふのである、益々びっくりして畏れ入り、平蜘蛛のやうになつてあやまつた。宗右衛門の方は「イヤこれは借りといた物の利息である。そんな事言はず取つて置いて呉れ」と、斯う言うて頻りに先方へ渡さうとしたといふ話である。私はこの話を聞いた時、若しや之が宗右衛門が、務め心でやつたものなら何の價も無い偽善である。所謂盜人にをいを遣るといふものである。けれども今宗右衛門のは、「實際に借りといった物に違ひ無い、定めて長いことを借り居たことであらう。之は僅ばかりであるがその間の利息である」と、無理押し付けに其の一步銀を押し付け、後をも見ずにどん／＼遁げ歸つたといふのであります。

一〇 業報の身が捨て置け

ぬとて

そこで巡禮は仕方が無いから、自分の罪を懲悔して、「何うか濟まぬから返して呉れ」と、其の着物と一步銀を渡し守に托して立つて行つた。そこで渡し守は夕方になりてその着物と一步銀を携へて「巡禮も恐れ入りて貴方に返して置いて呉れと言ふて立つて行つたから、之は貴方のものだから取つて置きなされ」と言ふて宗右衛門へ持つて來た。すると宗右衛門は見るなり、いやな顔をして、「あー又戻つて來たか、まだ前世の業が盡きぬのか」と、斯くつぶやきつゝ、終にその着物を賣り拂つて金に代へ、一步銀をもつけて、寺へ持つて行つて上げて仕まうた。渡し守は熟き感心して、あとにて宗右衛門に言ふやうには「貴方の遣り方の感心なのは、今更て無いから分るが、分らぬのは彼の巡禮の仕業である。聞けば前夜皆んなで非常に喜んだといふ話であるのに、それが朝になると、貴方の物を盗むといふやうな心が起つて來るといふは、とんと分らぬ。一體之は何うしたものだらう。」斯う言ふて聞くと

此の時宗右衛門が言ふやうには、「イヤ夫れは言ふな。如何にもお前の言ふ通り、二十四輩廻はりする人のであるから、そんな心の起つて來ぬ方が當り前ぢや。それに現にそんな心の起つて來ぬ方が寧ろ不思議なのぢや。それは向ふが前生に於て、わしに貸して置いたもの故、向ふの人は取り返へさんならぬし、わしは取られぬならぬ因縁が具はつて居たから、何程喜んで居てもそんな心が出て來るのぢや。故にそれは決して言ふ可き事で無い」と、斯う言ふたといふ話なのです。私は之を聞く迄、何うも『歎異釈』の十三章は、はつきり分らなんだ。親鸞聖人は人を千人殺すのも業報であるとは、隨分ひどい。之は唯圓坊が、しぶとい奴故、その唯圓坊にびつくりさせざうと思うて、斯う仰しやつたのだ。唯圓坊が悪い／＼と何時迄も言つて居たもの故、その唯圓坊に氣を附けます爲めに、こんなや然うでは無つたのである。即ち我々は人を千人殺さうと思うても、殺す可き業報が無ければ殺されぬし、その代りには業報が來れば殺すこともあるのである。即ち善きも惡しきも、我々には業報の爲し業であるが

その業報任かせてあるのが決してよいので無いのです。然るに今は、その何處迄も業報の身であるが哀はれ可哀想とあるお心である。一寸言葉を取りて言ふならば、設令自分が物取られても、あゝ可哀相に、前生の業報と一點夫れに不足を思はぬ宗右衛門の心に、直ぐ彌陀の本願が現はれてあると思ふのであります。故に私共はこの本願の深きに遇はして貰ふてみると、私共が斯程迄に業報の深きを御承知あつて、其の者故夫れが飽く迄見捨てられぬと仰しやつて下さる本願の慈悲である。故に私共に於ては

彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこはくの業をもちける身にてありけるを たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

と、即ち何處迄もこの私の業の爲めに現はれ、その業の者故助けてやらずには居れぬと仰しやつて、下さる處のお慈悲なのである。そこになると、私共の業報の強きよりも、佛の本願のお力の方が強い。故に又『和讃』には

罪業深重もおもからず

るなり。そのゆへは如來の御ころに、よしとおぼしめすほどにしりとほしたばこそ、よきをしりたるにあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたばこそあしさをしりたるにあらめど、煩腦具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにてはおはしますこそ、おほせはさふらひしか。

遺る瀬無き慈悲を聞かして貰ふ一念に、「今迄善し惡し知り顔に言ふて居たのが申譯けなき間違ひであつた。善きに就け惡しつき、飽く迄まことならぬ私を飽く迄お見捨てなさらぬ如來の御まこと一つであつたか」と、茲で長の迷ひを断ち切り、六趣四生の因亡し果滅するのであります。

諸佛弟子金剛心行人也。由斯信行必可超證。

諸佛弟子、金剛心行人也。由斯信行必可超證。
大涅槃故曰真佛弟子。

即ち以上申述るが如く、この佛の眞のお慈悲を頂いた
一念は、私のこの淺問しき、この業報の深きを御覽じ
て、飽く迄お見捨て無き佛のお心が、心底迄真心徹到
した金剛心の行人である。故に之れが眞の佛弟子であ
るとのお知らせであります。こは殊に御本書は切り詰
めた漢文でお書きになつてある故、何となく理窟めい
て思はれ易い。假名ならば『歎異鈔』の如く頂きよい故

専修念佛のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ争論のさふらふらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人もたずさふらぶ。そのゆへはわがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればばなることあるをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなどいふこ

一一 真の佛弟子

さて以上は前席の横超断四流の味ひに就き、重ねて申述べたのである。之から話す眞の佛弟子釋も、即ちこの頂いた味ひから出て來るのであります。先づ言眞佛弟子者、眞言對偽對假也。弟子者釋迦

法敬と我とは兄弟よ。

とあるも、この頂きた味ひからの御言葉に外ならぬの
であります。

一一 真 偽 勘 決

と不可説なり。如來よりたまはりたる信心を、わが
ものかほにとりかへさんとまうすにや。かへすく
もあるべからざることなり。自然のことなりにあひ
かなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべき
なりと云々。

即ち斯く遣る瀬無き佛のお心を頂いた一念には、佛の
弟子と仕て頂くのである、即ち眞の佛弟子とならして
貰ふのである。即ち釋迦諸佛の弟子である故、親鸞の
弟子である可き筈が無い。故に親鸞は弟子一人も持た
ぬとの仰せであります。併しながら之も修養的に、聖
人は弟子を澤山持らながら、一人も持たぬと言はれた
のだと、聖人のお言葉を謙遜の意味に思ふと大きな間
違ひである。之は決して謙遜して言はれたのでは無い。
聖人の仰せを謙遜のお言葉だと、殊更身を卑うして仰
しやつたものゝ如く取ると、聖人の御真意は頂かれぬ
のであります。即ち聖人にする時は、實際に眞の佛の弟
子であるから、親鸞の弟子では無いと仰しやつた迄で
ある。故に親鸞より言ふ時は、御同朋である、御同行
である、信の上からの兄弟であると仰せ下さるのであ
る。『御一代記聞書』に蓮如上人が法敬に對し、

處で茲にえらいお言葉がある。

『眞の言は偽に對し、假に對するなり。』

之がえらいお言葉なのであります。即ち私共斯く眞の
佛弟子に仕て頂くのであるが、それにはこのお慈悲を
頂か無くてはならぬ。私共は有りと有る者が、皆な佛の
弟子といふことではないのである。成る程佛の方か
らは、十方衆生皆な我が子と名乗りて残らずを助け度
い思召でましますのであるけれども、その佛の遣る瀬
の無いお心を私共が頂く迄は、佛ばかりに心配懸けて、
此方は何處迄も遁げ廻はりて居るものである。故に之
では眞の佛弟子とはならぬ。即ち眞の佛弟子とは、こ
の廣大な佛のお心が頃け、有難やと
彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生
をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひた
つこゝろのおくるとき、すなはち攝取不捨の利益に
て居るものであります。

うた者丈ヶが眞の佛弟子である。他は如何に念佛を稱
へやうが、如何なる種類の着物を着やうが、如何なる
佛語を口にしやうが、この眞のお慈悲が頂けた者で無
い限りは、未だ眞の佛のお心を得ぬものである。未だ
本もので無いとの思召なのであります。故に聖人は念佛成佛是眞宗と示して、この本願念佛の教こそ眞の眞
宗であるとお知らせ下された。

念佛成佛是れ眞宗、

萬行諸善これ假門、

權實真假をわかつて、自然の淨土をえぞしらぬ。

それ故このお慈悲に安心出來ざる限り、皆な偽りてあ
り、假である。權化方便の假りの道、偽りの道に止つ
て居るものであります。

一二 真の教、假の教

そこで又入らざる憎まれ口を申すやうであるけれど
も、序に申します。今日は宗教が大に世間の注意を惹

くやうになつたもの故、宗教と言へば何れでも是れで
も皆な同じであると様に思うて居らるゝ向きがある。
けれども今言ふ此の信仰上の意味合ひから言ふと、信
仰にはこの眞偽の辨別といふことが現はれて來るので
す。

即ち偽とは佛教ならざる自餘の教道が皆な是である。
又假といふは、今の少し前の處に

假と言ふは、即はれ聖道の諸機、淨土の定散の機なり。
即ち同じ佛教の中にも自力聖道門の教、及び淨土門
中にもこの眞のお慈悲に夜の明けざる間は、皆な是
れ假である。故に親鸞聖人は、斯く迄私の仕て見やう
無きをお見捨て下さらぬお慈悲、之に腹ふくらせて貰

偽と言ふは則ち六十二見九十五種の邪道是なり。

即ち偽とは佛教ならざる自餘の教道が皆な是である。

ある。成る程あれどもこれでも宗教たるには違はぬけれども、この信仰の上より言ふ時は、もう一步でもこの佛のお慈悲といふことを離るゝ時は、如何なる教てもはや僞りの九十五種の外道である、異學異見別解別行である、眞のお慈悲とは兩立せぬものとなつて來るのであります。故に親鸞聖人には『悲歎述懐讃』に、

五濁增のしるしには、この世の道俗ことぐく、外儀は佛教のすがたにて、内に外道に歸散せり。かなしきかなやこのごろの、和國の道俗みなともに、佛教の威儀をもととして、天地の鬼神を尊敬す。との嚴しき御誠めがある。故に極めて世間一應の意味で宗教を尊重しなければならぬと、ごく凡俗に言うて居るのならばよい。けれども眞の信仰の立場からは、この眞假の區別があることを辨へて、唯大まかに何れでもよい流儀であつてはならぬのであります。茲は親鸞聖人は『御傳鈔』には力を籠めさせられて、竊に以れば聖道の諸教は行證久しく廢れ、淨土の眞宗は證道今盛なり。然るに諸寺の釋門教に偏くして真假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷うて、邪正の道路を辨ること無し。斯を以て興福寺の學徒云々。

聖道の人の頭で見る時は、如何にも形の上からは在來の佛法を壞すものである、害うものである。終に御流罪といふやうの事になつたのであります。故に聖人が眞偽の區別といふことを仰しゃらぬ時は、流罪に遭遇ひになることは無つたのである。又態々『教行信證』を製作して眞偽の辨別を示し、眞佛土假身土をお立て下さることも入ら無つたのである。然るに人は聖人のこの眞宗といふ言葉を、法然聖人の三百八十餘人の門弟中、親鸞聖人一人はこの眞宗といふ旗を押立てゝ眞宗ぢや／＼と言はれたものゝ如くに用ひて居る。併しこれを言ふには親鸞聖人が法然聖人の他の御門弟達とは頂き方が違つてある點を言はなくてはならぬ。毎度の事であるけれども、茲をも一度聴いて頂き度いと思ふのであります。

一四
聖人の信仰と三百八
十餘人の人達

話が横道に這入るのでありますけれども、法然聖人の三百八十餘人の御弟子達は、何う聞いて居られたのかといふに、法然聖人の言葉の通り、法然聖人の化儀

を手本として、その手本通りに文字を書いておいでになつたのである。法然聖人は『選擇集』に、選擇本願無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本とお示し下さるから、南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へさせて貰ふのである。法然聖人はあーいふ風に一代持戒堅固でおやりになつたのであるから、我々も戒を持つて行かして貰ふのである」と、即ち法然聖人の手本通りに、鷄鶴^{あひづね}反しに行じておいでになつたのである。故に形の上から言ふと、法然聖人と三百八十餘人の人達とは全く同じになつてある。處が親鸞聖人のは様變りて、法然聖人は念佛爲本であるのに、親鸞聖人のは信心爲本である。法然聖人は形の上では何處迄も聖僧の姿を持つておいでになつたのであるのに、親鸞聖人のは肉食妻帶である。之が何ういふ譯かといふに、親鸞聖人のは法然聖人の手本通りにおやりになつたので無い。親鸞聖人のは、法然聖人が聖人の爲めに、「汝一心正念にして直ちに來れ」との仰せのまにく、直にそのお言葉をハイとお受けになつたのである。法然聖人が「唯もうこの念佛ばかりであるぞ、その何れの行も及ばぬ、仕て見やう無き者の爲に、御成就下されし南無阿彌陀佛であるぞ」と

と仰せられてある。この法然聖人親鸞聖人の流罪は何故起つて來たかといふに、親鸞聖人が唯人並に、戒を持つもよい、修養するのも結構であると、當時の時勢に合ふやうに言つてお出でになつたのならば、こんな迫害にお遇ひなさることは無つたのである。けれども親鸞聖人は、我は何うあつても修行が出来るの、戒が持てるのとは言はれぬ、我は何處迄も破戒無戒の親鸞である、愚癡無智の親鸞である、故にこの親鸞の身としては、到底坐禪戒行の立派な立場では可かぬ、唯飽く迄も斯の親鸞の罪惡深重を知召し、何處々々迄もこの者をお見捨て無き選擇本願南無阿彌陀佛のお恵みこれ一つである。法然聖人はこの仕て見やうの無い、破戒無戒の奴をば助けやうとの思召故、彌陀の本願には戒行も修行も、乃至發菩提心迄も擇び捨てさせられたとお教へ下された。其の仰せの通り『選擇集』に、破戒無戒とあるはこの親鸞の事である、愚癡無智とあるは親鸞の身の上である。全く親鸞一人が爲めの彌陀の五劫思惟の本願にてましませしと、聖人が在家の姿の儘でお喜びになつたのが聖人の化儀である。その聖人の化儀の様を、この本願不思議の御眞意の頂け無い自力

の一言の御教示の下に、「ハイ、有難うムいます」と、お頂きになつたのである。即ち親鸞聖人から言ふと、法然聖人の立場が直ぐ如來の仰せとなる。如來の立場で法然聖人が、斯く還る瀬無くお示し下された事となる。故に親鸞に於ては、唯よき人の仰せを蒙りて信する外に別の仔細なきなりとなつて來たのであります。故に聖人のは他の人達のとは全く違ふてある。では常に思ふことありますが、親鸞聖人は、法然聖人の御教化をば、教行信證の中では『行卷』にお入れなされてある。御承知の如く『行卷』は、十方恒沙の諸佛が讃歎なされ、釋尊が此世に出現してお説き下されたも、この第十七の願であると、即ち南無阿彌陀佛の念佛をお説き下された卷である。その中へ法然聖人の『選擇集』をばお入れなされであるは、聖人には法然聖人の御教化が手本になつてあるのでは無い、直に佛の直説となつてあるからであると思はして貰ふのであります。で昨夜も申した事であるが私が、佛のお慈悲は、私共のこの仕て見やうなき眞底を知り抜き給ひて、哀はれとお見捨て下さらぬお慈悲であると申上る。言ふ私の積りでは、その言葉の下に皆様に、「あゝ難有いお慈悲」

と迄言はるゝこの『選擇集』の御教化が、親鸞聖人の『教行信證』の中には頗る引用されて無い。唯僅に今言うた
選擇本願念佛集に云く、南無阿彌陀佛、往生之業念
佛爲本。
の開卷のお言葉と、
夫れ速に生死を離れんと欲はゞ、二種の勝法の中、且く聖道門を擋きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲はゞ、正難二行の中、且く諸の難行を抛すて、選んで正行に歸すべし。正行を修せんと欲はゞ、正助二業の中、猶ほ助業を傍にして、選んで正定を専らにすべし。正定の業とは即ち是れ佛名を稱するなり。稱名は必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故に。

之は大分話が法門沙汰に渡るのでありますけれども、『選擇集』本願章の中には、彌陀の本願南無阿彌陀佛は、私共愚癡無智、少聞少見、破戒無戒の者の爲めに、有らゆる智慧、高才、多聞多見、持戒持律等をば總て皆な擇び捨て、唯南無阿彌陀佛の一行をば選擇攝取し給へる廣大の思召であることが、懇々と説かせられてある。法然聖人の御流罪は、實にこれが爲である

一五 法然聖人の教と聖人の信
之は大分話が法門沙汰に渡るのでありますけれども、『選擇集』本願章の中には、彌陀の本願南無阿彌陀佛は、私共愚癡無智、少聞少見、破戒無戒の者の爲めに、有らゆる智慧、高才、多聞多見、持戒持律等をば總て皆な擇び捨て、唯南無阿彌陀佛の一行をば選擇攝取し給へる廣大の思召であることが、懇々と説かせられてある。法然聖人の御流罪は、實にこれが爲である

悲」と聽いて頂き度いばかりなのである。爾るに皆様の方では、直ぐその言葉を手本として、「何うも然ういふ具合にならぬ、こんな事では」と、大抵が斯う仰しやる。それは「近角はあゝいふ風の信仰を持つて居る。自分もあれ成り度い」と、不知不識の間に、私の喜ぶ風に喜び度いと斯う思召して居らるゝからである。先日も或方が、「先生何うしても私には分らぬ。長いこと申された。私が申したには、「イヤそこ、そこである。その分らぬ處、理窟ばかり言ふとる處が哀はれとある。廣大の御眞實なのである。何程聞いても斯く分らぬ者だから、一文不通と仰しやつて下さるのである。私共は聽かう」と、五年十年聽いても、聞いて分つた事は皆な斯くはだから理窟になつて仕まつて、仕舞ひには手も足も、一言の言葉さへ言うて見やうが無くなつて来る。爾るに夫を見て、下さる佛であるから、佛の方では疾くより、その一文不通の汝故斯の通り捨てぬと言うて、下さるのでは無いか」と申上げた事であつたのであります。での如く我々は、設ひ戒定慧の三學が立派に行へても、それが間に合つてお助けに預れる

ぬ者を、見捨てぬ慈悲の一枚の手織りである。この親の手織りは、外の着物をも着られる者に、着せやうと織上げたのでは無い。外の着物では忽ち破りよごして仕舞ふ、着る事の出来ぬ者の爲めに、態々着させ度いとしてこしらへ上げて下された一枚の手織りである。故にたつた一枚なれども、どうか親の折角の手織り故着て呉れるやうにとあるが、法然聖人の選擇本願南無阿彌陀佛の御化導である。故に聖人は先きいふ如く、直ちに之を『行卷』に持つて来て、即ち今言ふ「その親の手織りを着させて貰ふのだ」といふ處をお示し下さい。併しそれが今いふたつた二個所の御引文に了つてあるは何故であるか。聖人はその法然聖人の御化導を直ちに信の上にお頂きなされた。而して「その一枚は、實に斯く仕て見やうなき親鸞の爲めに御成就下されたのであつたか」と、それが殘らず頂き心地となりて『信卷』の上に出てあるからであると、この事に氣附かして貰ふたのであります。

一六 『選擇集』は薬の能書き では無い

爲めの親の手織りの着物である。故に自分はまだそれ程の重病人ではないが、併し自分とて成る程惡しき者には違はぬのであるから、夫れ程の重病人が飲んできく藥なれば、自分等に於て飲まして貰へば猶ほ良からう」と、之で飲まれたのであるから、即ち之は「悪人なをもて往生をとぐ、如何に況んや善人をや」になる。故に折角法然聖人の直き／＼の御教化に遇ひながら、して聖人の仰せ通り南無阿彌陀佛々々々と念佛しながら、「併しこの藥を飲んだ上にも、出來る善事は仕た方がよいではないか」と、終に戒も持つ、座禪もする、念佛も出来る丈け數多く稱へると、斯ういふ事になつて來たのであります。處が親鸞聖人の頂かれたのは然うで無い。「自分はまだ危篤の重病人では無いが」といふ聽きやうでは無つたのである。聖人にする時は、『選擇集』に、破戒無戒の者、愚癡無智の者、危篤の重病人となるは、然ういふ者が飲むと利くとある薬の効能書きでは無い。自分が今現に何とも仕て見やうの無き此危篤の有様を、向ふ様から先き召し、その者を捨てぬとするは、然ういふ者が飲むと利くとある薬の効能書きである。遺る瀕無き慈悲のお言葉であつたのである。故に聖人におかせられては、その向ふ様の仰せをば、直

猶ほこのことをいふと、毎度言ふことなれども、茲に一服の薬がある。この薬は最早や如何なる醫者でも見込みの無い、如何なる薬でも間に合はぬ、危篤の病人に飲ませる爲め、特別の醫者が特別の骨折りて作り上げて下された、選擇本願南無阿彌陀佛の薬である。即ち五劫思惟兆載永劫の御苦勞とのことは、此醫者がその直る可らざる病人を直してやり度いとの、長々の間の御心配であり、御眞實である。そのことを法然聖人は『選擇集』を著はして、私共にお知らせ下された。所であつたのである。それは選擇本願の薬の効能書きに着けながら、如何にしても本當の處が頂けなかつた、ある。三百八十餘人の人達が、「外の着物の着れぬ者に着せる爲めの親の手織りの着物である。故に着ようと、病氣が直る／＼」と思うて、この薬を飲ませたのである。三百八十餘人の人達が、その親の手織りを身に着けながら、如何にしても本當の處が頂けなかつた、その頂けなかつた間違ひの源は何處に在るか。唯一ヶ所であつたのである。それは選擇本願の薬の効能書きに眼をつけられた。「この薬は他の薬で可かぬ者に飲ませる爲めの薬である、他の衣類の着られぬ者に着せる爲めの薬である。」といふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみがぞかし。云々即ち「何れの行も及ばざる身を、見捨てぬとの慈悲にてましませし」といふが、聖人の頂かれた言葉となるのであります。そこで三百八十餘人の御門弟達の如く、『選擇集』の御教化を直ぐ手本にして、しっかりと頂くは、即ち律法的であつて、師の教へを眞似をするものである。之では何もならぬ。今親鸞聖人にする時は、

師の仰せは何であらうが言葉は何うあつてもよい。が不思議なる哉、この右にも左にも、何れの行も及ばざる仕て見やうなき心中をこころ底知り抜き下され、哀はれとある本願の御眞實と、面の當り法然聖人よりお聞かせに預つて見れば、如何にも親鸞一人が惡しきが爲めの長の佛の御苦勞より外に無つたのである。この破戒無戒愚癡無智の親鸞であつた爲めに、之に着せやうとの長々の親の手織りの御苦勞であつたかと頂かして貰ふ外なくなつて來る。即ち親の選擇本願の御眞實通りに頂いたのであるから、即ち眞の佛弟子である。又親鸞聖人はその親の眞の御慈悲を知らして下された法然聖人であるから、聖人の事を眞の知識とお喜びあらせられた。聖人の『源空讚』には

眞の知識にあふことは、かたきがなかになをかたし流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしづぞなき斯く親鸞聖人の眞宗には、何處迄も眞の字がついて廻はるのであります。

一七 「選擇集」の教化と聖人 の信卷

そこで先きいふ『選擇集』の御教化が、『信卷』の何處に出てあるかといふに、前年度講本に供へた三心釋の初に、問ふ。字訓の如き、論主の意三を以て一と爲せる義、其の理然る可しと雖、恩惡の衆生の爲に、阿彌陀如來已に三心の願を發たまへり。云何か思念せむや。答、佛意測り難し。然りと雖竊に斯の心を推するに、一切の群生海無始より已來、乃至今日今時に至るまで、穢惡汗染にして清淨の心無く、虛假詭僞にして眞實の心無し。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一剎那も清淨ならざること無く、真心ならざること無し。如來清淨の真心を以て、圓融無碍不可思議不可稱不可說の至徳を成就したまへり。如來の至心を以て、諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回施したまへり。云云。

即ち「一切の群生海無始より已來……虚假詭僞にして眞實の心無し」とあるが、『選擇集』の何れの行も及ばぬ者との事である。その及ばぬ者の爲に、「是を以て」「是を以て」は「それであるから」である。——それ

であるから「如來一切苦惱の衆生海を悲憫して……一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまへり」、即ちその仕やうのなきまと無き者であるが哀はれと、お見捨て無き佛のおまことにてましますとてある。即ち斯く『選擇集』の御教化の意味が、茲ですかり頂かれるのであります。そこで法然聖人の『選擇集』の御教化は、この親が長々御苦勞の南無阿彌陀佛の馳走であると、

御馳走を前に突き出して下されたものである。その御馳走を聖人が有難うと、腹一杯頂かれた味が、この仕やうの無き身を御見捨て無きお慈悲であつたか、難有いとのお喜びとなるのであります。

前に歸りて

『釋迦諸佛の弟子なり、金剛心の行人なり。』

こは『和讃』に

真心徹到するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひと、ひとしと宗師はのべたまへこの佛の真心が徹到した金剛心の行人の事である。

『斯の信行に由つて、必ず大涅槃を超證すべきが故に、眞の佛弟子と曰ふ』

眞の佛弟子といふは、眞の佛の御眞實を聽かして貰ふ

と、其の一念に私の如何なる缺乏も、不満足も、満足され充足さるゝ佛の廣大の信行を賜はりて、その信行一つの故に必ず横に五趣八難を飛び超えて大涅槃の證を開かして貰ふ身と仕て頂くのである。故にその者である故に眞の佛弟子と云ふとの御示してあります。

一八 廣大勝解者

次には

大本言設我得佛、十方無量不可思議諸佛世界衆生之類蒙我光明觸其身者、身心柔軟超過人天。若不爾者不取正覺。

十方無量世界の衆生の類、若し三塗勤苦の處に在りても、この私の苦しい心底をば知り抜き給ひて、飽く迄お見捨て無き、この佛のお光に遇はして貰ふ時には、そのお光に觸るゝや否や、私の如何なる苦みも悩みも一邊に皆な消し失ひて、身も心も融かして仕まみて下さるお慈悲であるとのお言葉である。身も心も融かして下さるとは、私共が人に隔てたり、善し惡しの五分々々根性を起して苦しんで居る。爾るにその苦しむ汝が如何にも哀はれと、廣大の御眞實で向ひ通しにして

下されるこのお慈悲の光に一念觸るゝなり、

解脱の光輪きはもなし、光觸かふるものはみな、

有無^{あると}べたまふ、平等覺に歸命せよ。

「如何にも恐れ入りました」と、その一念に今迄の人を不足に思ひ、善くせぬならぬと力み苦んだ心が何處へやら消えゆきて、唯一味のお慈悲に満足せしめられ、人天に超過する。この世に居て人天に超過するとしてあるから、如何にもひどい事である。信仰上より来る喜びには、この人間以上の味ひがあるのである。この故に金剛心の行人である、眞の佛弟子であるとの仰せてあります。次には

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界衆生之類聞我名字不得菩薩無生法忍諸深總持者不取正覺無生法忍とは先き程も申した『歎異鈔』の御文に一念發起する時、金剛の信心をたまはりねれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて命終すれば、もうくの煩惱惡業を轉じて、無生忍をさとらしめたまふなり。

即ち一念の時に命終して、現世に於て無生忍を悟らし

て貰ふ。即ち未來眞實の證の境にゆかせて貰へる身と決まる事である。又深總持は陀羅尼の德である、善き意味に於ての諸の陀羅尼の德をその一念に得させて頂くことである。それは頂く一念に廣大なる佛のお慈悲の至徳が私の心中に入り満ちて下さるから、即ち眞の佛弟子たる味ひをお知らせ下さるのであります。次には

又

無量壽如來會言若我成佛周徧十方無量無邊不可思議無等界衆生盡蒙佛威光所照觸者身心安樂超過人天若不爾者不取菩提

こは今觸光柔軟の願文を、『大經』異譯「如來會」によりてお示し下されたのである。
又言聞法能不忘見敬得大慶則我善親友
こは如何にも有難いことである。私共この淺聞しさを飽く迄お見捨て無き法を聽かして貰ふて「能く忘れず」——自分の方より忘れやうとしても、佛の方から飽く迄忘れて下さらぬのである。「見て敬ひ獲て大に慶は」とは當り前ならず、超え勝れた極樂の門故異門である。異ど——故綱島梁川氏はこの見敬の二字を死ぬ迄喜ばれた。すると釋尊は吾が善き親友と仰せ下され、又は

彌勒と等しと言ひて下さる。又聖人は同朋同行とかしづきて仰せ下された。如何にも譽め過ぎのやうにあるけれども、譽め過ぎで無い。至淨至眞の佛のお心が、私の心に徹到して下された一念の様として、之が當然に出て來るのであります。

又言其有至心願生安樂國者可得智慧明達

功德殊勝

佛の廣大なる至心を頂き、報土得生を喜ぶ身と仕て頂いた者は、「智慧明達し」——即ち如何なる罪惡をも見捨てぬ佛の眞實の智慧が心底迄通りて、不可稱不可說不可思議の「功德殊勝なることを」得させて頂くのである。

又言廣大勝解者

勝解者とは一言に言へば「分つた者」である。何が分つたといつても、このお慈悲が分つた程廣い分り方は無い、故に廣大勝解者である。人間に於ては人の親切が分つたと言つても、それは一部が分つたのである。お慈悲の上からは、人が如何に腹立て自分に悪しく向つても、それが無理無いといふとこが分つて來るのであります。

又言如是等類大威德者能生廣大異門

威德は佛の威神功德である。その佛の功德を頂いた者であるから、大威德の者である。廣大異門とは先輩の説によると、淨土の廣大の證の境界のことである。異とは當り前ならず、超え勝れた極樂の門故異門である。その廣大なる證の境界に生れさせて貰へる者であるとの仰せである。

又言若念佛者當知此人是人中分陀利華

親鸞聖人は『入出二門偈』の中に

この人は即ち凡數の攝に非ず、是れ人中の分陀利華なり。この信は最勝希有人、この信は妙好上々人々なり。

と仰せられあつて、凡數の攝に非ずとは、最早や凡夫の數で無いとのことである。即ち一念に佛の廣大なる御まことを此方の心に丸貰ひにして、攝取不捨の光明中の身の上とならせて頂いた者は、この世にありながらも最早や凡夫の數を離れてある。即ち人中の分陀利華である、白蓮華である。即ち眞の佛弟子であるとのお知らせである。今席は之にて止める事に致します。

佛智の不思議

麻 生 介

三八

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、
私は今回北里研究所の吉賀氏結核療法講習の爲め

に、東京にまわりましたが、それは表面的目的で、實は
先年私が東京に居ました時、御恩のある師長に對して、
相濟まぬことがありましたので、其お詫をしたいのが
眞の目的でありました。元來私は大正元年から、此別
府町に開業して居る者であります、大正貳年の佛教
夏季講習會が當地の西法寺であります時に、近角先
生の人生問題及歎異鈔の御講話によつて、初めて大非
のやるせなきお思召に、氣附せて頂いた者であります。
それですから私が今回師長にお詫をするについては、
先づ第一に近角先生にお逢ひして、一つには先年の御
教化の御禮も述べさせて頂き、又一つにはお詫の方法

についても、御教示を仰きたい考であります。つまり子供が父親に叱られてお詫をする時、母親のさしづ
に従うやうな心もちで、先生をお訪ねしたことてあります。其時先生はお風を召して居られましたが、私が
お伺ひすると、御親切にも玄關まで御出迎ひ下さいま
したので、今更乍ら嬉しさが胸に充ちてまわりまし
た。一室にみちびかれて、先生とさし向ひになりました。當時は最早暖い慈母の懷に在るの思ひがしました。而
して私の過去に於ける罪惡も煩悶も、佛のお思召の難
有かつたことも、何もかも打ちあけて申し上げました
から、時間の経つのも忘れてしまひました。先生も私の
入信を非常にちよろこび下さいまして、歸つた上では
告白を書いてよこせといふ仰であります。私は筆さ
へたてばよろこんで書かせて頂くのですが、辿
も人様に讀んでいたゞけるやうなことは書けまいと思

つて、どうしやうかと考へましたけれども、マー書い
て見ましやうとも受けをした次第であります。お受け
をした以上は、兎も角書いてさしあげて見ますから、
若し私の告白を求道誌上にお出し下さるやうな事があ
つたならば、何卒皆様に御判断御推諷を御願ひ致しま
す。

二

抑も私が信仰に入る(信心をいたゞく)の徑路、又は
動機とも申すべきものは、實に家庭問題であります。
従つて先づ私の家庭の状態を申上げて、自然に信仰の
ことに移りたいと思ひます。

元來私は肥後の國の生れで、家は頗る貧しい方であ
りました。私は二男に生れましたが、兄は早くから師
範學校に入りましたので、私は十八歳まで家業の手つ
たひをして暮しました。十八歳に初めて東京に出て、
醫學に志したのであります。素より學資を送つて貰ふ
といふわけではなく、或時は小使となり、或時は醫師
の書生となりして勉強して居りました。然るに或る時
親戚の人から養子に行くことを勧められ、先方は資産

があるから、卒業した上は醫者がはやらなくとも生活
には差支はない、たゞ村の便利をはかる爲めに、醫師
を養成したいといふ話でした。私は養子といふものは
面白くないと聞いて居ましたから、一應断りましたけ
れども、再三勧められたので、兩親の意に任すること
にしました。兩親も初めは承諾しませんでしたけれど
も、親戚から切りに勧められたので、遂に或る條件の
もとに私を養子に遣ることになりました。私は麻生家
に入籍してから、三四年の後に養家の長女と結婚して
湯の平に開業することになりました。素より狭い村で
はあり、私の技術はまずいと来て居るから、醫業のみ
で生活することは出来ないので、養家から多大の補助
を仰いで居つたのであります。然るに四五年を夢の間
に過して居るうちに、妻は大病に罹つて遂に鬼籍に入
るといふことになりました。これからが私の一身上に
於ける大波瀾の始まりであります。

私は妻の死亡しました時に後妻を他から迎へること
は、將來の爲めでないと思つて拒みましたけれども、養
家から切りに勧められるので、終に義理にせまつて貰
つたやうなわけであります。處が月日のかつて從つて

養家の待遇もだんく、おもしろくない、今までの補助もしなくなるといふ有様であるから、斯る片田舎にグズ／＼して、養家を的にして居つたならば、行末はどうなるであらうか。之れは養家を信頼して安閑として居る場合ではない。養家には實子も澤山あるから、自分の初め養子に來た時は、家督を相続さするといふ話であつたが、今は妻が死亡した結果、少しも血縁がないので、それもあてにはなるまい。それかといつて此狭い村に居ては、醫業のみの收入で、將來妻子を養育するといふことは、到底不可能である。それなら他の有望な土地に出かけて、開業することはどうかといふに、それは養家に於て断じて許さない。こゝに至つて私は進退これきはまるといふ苦境に陥つた。妻の生存中は彼をたのみとし、養家をあてにして居つたが、今は昔の夢となつたのであります。或時私は養家に對して、「私が此の村に安心して、醫術を開業して居られる丈けの資産を分配して呉れるやう」に願つたこともあらが、それも叶はなかつたのであります。此際私が養家に對する義理を打して、飛び出すことができれば、苦しむことはないのですが、夫れは私の性質と

のことであらうかと、私は斯くして出來る丈け努力して見ただけれども、餘りおもはしくない。其内に阿蘇野にも別に醫師が出來て、一層つまらなくなり、おまけに子供は一人殖えて來さうになりました。かうなつて見るといよ／＼此ま湯の平に安閑として居ることはできない、サー困つたことになつたものであると、毎日／＼煩悶して日を送つて居つたのであります。私は其時かういふ折りは尋常なことをして居つては到底埒はない、何とかして此難關を切りぬくる手段を講じなければならぬと思つた。そこで先づ何處へ行つて開業しても差支へないやうに、自分の腕前を磨いてくる、細菌學を修めて置いたならば、將來の爲めに見て見ることにしました。現在の窮状と將來の希望とを精しく認めた手紙を出した處が、病院に使つてかたはら研究をさせてやらうといふ返事をいたゞいたので、丁度暗夜に一點の光明を認めたやうに思ひました。そこで養家には三ヶ月斗り東京に行つて研究をして來ると、いつて、湯の平を出ました。それは養家に於て研究の

して出來ない。つまり他にはゆかれず養家はあてにならず、土地では發展の餘地がないと思つて、非常に煩問しました。天我をたすくるの神なきや、地我を救ふの人なきやといふ嘆聲を漏したのは、此時であります。

併しモーこうなつたら仕方がないから、出來る丈け働いて見やうといふ心になり、村内文けでは土地がせまい(戸數百未満)から、非常な山越して約參里程ある、阿蘇野といふ處に出張所を設けて、月に六回行くことにしました。出張日には午前三時頃から起きて出かけるので、鶴の聲が川の瀬の音につれて聞こゆるばかり、田伏といふ二三軒人家の在る處を過ぐれば、全く人里を離れた峠である。其峠が鎌ヶ台といつて、私の爲めに忘るゝことの出來ない一時の戰場であります。其峠を八合目斗り登つて、後を振りかへつて見ると、中津留といふ處に人家の燈が遠くかすかに見える。私は何時も其燈を見て、自分の身の上を考へたことがある。自分は之まで隨分苦しんで來たが、前途に何等の光りも認むることはできない。今中津留の人家に燈が見ゆるやうに、前途に一點の光明を認むるのは、そも何時

爲めに永い間留守をあけることは、許して呉れないからであります。私が東京に出て翌年頃、湯平には非常な大火がありまして、養家などは殆んど丸焼けになりました。

さて私は東京に出てから、細菌學の方は一通研究させて貰ひましたが、生活の方は相變らず苦しかつた。そこで病院に出る餘暇で開業しましたけれども、一向おもはしくない、其爲めに再三場所を替へて、同職の人から笑はれたこともあります。「人の一生は重き荷を負ふて遠き路を行くが如し、急ぐべからず」といふ家康の遺訓もありますが、さういふ場合は金言も何も忘れがちであります。而して信仰のない時は、人の善いことよりも悪い點が目につくものであります。タトヘ名高い學者でも人間である以上は、其行ひの全部が善いといふわけにはゆかない。そこでよくない點によく目のつく私は、「人生のみを見て居るから」知らず識らずの間に淺見しい心になつたかと思はれます。「かばかりのことは浮世のならひどと、心にゆるすはてぞくらしき」一體私も初めから悪くてもよいといふ考へは毛頭ない。二宮翁の報徳記、福澤翁の百話及修業立志

篇、黒岩涙香の精力主義等を讀んで、修養の方面にも多少は心がけた積りであります。其當時の隨感錄を開て見ますと、小心翼々以て大功を期すべし、恃むべきは唯自家の才力あるのみ。神は汝を救ふの力を唯だ、汝の手にのみ托し置けり。汝己の力を以て自ら救へ。

我を救ふ者は我なり。などいふことが書き取つてあります。然るに今は其修養書が一つも役に立つて居ない、善くしたい／＼却つて悪くなつたことに驚きます。私は自分の行爲が實に淺間しかつたと氣づいてから、穴にでも入りたいやうに懺愧のあもひに堪へず「自分

は悪いことをした、實に相濟まぬ／＼と思つて煩悶して居ました。私の煩悶に對して同職の方や友人は「君そんなに心配したまゝな、成程君の行爲もよくはなかつたが、よく世間にありがちのことだ」といふて慰めてくれます。つまり悪いけれども心配はするなどいつてくれるのですが、私は素より一向安心は出来なかつた。此の私の煩悶に對する佛の仰はどうであるかは、後になつて述べさせて頂きます。兎に角私は善くなりたい／＼で修養書なども見て居つたのに、却つて悪くなつて、其爲め煩悶の淵に沈みました。論語讀

みの論語知らずとは、餘程味ひのあること、思はれます。

さて私は東京にも永く居ることができなくなり、大正元年の暮に、此別府に歸りました。而して直く開業の準備に取りかゝりましたが、素より資本はなし、知るべは居ない。家賃なども東京とかはらない位で、却々困難したことあります。或る旅館の一室で考へ込んで居ますと、遠い濱邊の波の音さへも、私の胸の内をませかへすやうに感ぜられました。

三

話が前後しますけれども開業する前にチヨト湯の平に歸つて、人の話を聞くと、養家では私の留守中に戸籍面を變更して、私には相續權をないやうにしたといふことあります。抑も私が養家に入籍した當時は、男子（私の爲めには義弟）が一名あつたけれども、私の先妻をして世を繼がしむる考へから、生れおつると同時に隠居の子として入籍してあつた。而して養家の人の等も、先妻の生存中は、先妻や私をして世をとらしむるやうに申して居られました。然るに養家に於ては先

妻の死亡した後は、段々と待遇も悪くした上に、裁判所に手續して、相繼權までもないことにしたのであらうか。それなら默つて居るわけにはゆかないと思つて、或親戚に頼んで交渉したけれども、今は火事後で何とすることも出來ないといふことでありました。然るに私は新開業で非常に困つて居る時でしたから、再び檀那寺（眞宗）の住職に頼んで、養家に話をして頂くことにしました。住職の方は口先ではうまく御受合ひ下さいました。私は手紙で再三照會して見たけれども、何等の返事もなかつた。而して一度はお訪ねしたけれども、要領を得ることはできなかつた。今から思へば私は人生問題をもつて佛をたづねて居つたにもかゝらず、救はれなかつたのである。爾うして居るうちに或る友人が、さういふ法律上の事件は辯護士に依頼しなければ、埒のあくものではない。僕の知つて居る辯護士があるから、紹介して遣うといふてくれました。私は成程夫々専門のある世の中であるから、法律家に依頼するのが當然であらうと、遂に辯護士に頼んで平和的に交渉して貰うことにしました。

私はこんなにして人生の苦痛をなめて居りました時、不圖信仰の必要を感じました。夫れば私の今の家庭が、私等夫婦と子供が二人居るばかりで、老人が居ない。私等の上にたつものがないので、互に五分五分の考を以て言つたり仕たりしますから、其結果自然衝突が起ります。夫れを二人の子供が見習ふことになります。つまり親たちの行ひを子供が見習ふやうになる。次には親と子供との間にも、怒鳴聲が絶へないといふ有様で、之れが私にはどうも不快でたまらなかつた。「横さまに這ふて教へたかにの子に直ぐにはへとは無理な親かな」然るに妻の母が、里から來て居ます間は、互に遠慮をして居るので、私等の間に比較的衝突の起るやうなことがない。そこで私が氣附いたのは、老人といふものも家庭には必要である。併しながら、今更老人を迎へるといふことはできないから、コリヤ一つ信仰を求めて、精神上の親を得たならば、屹度よいであらうと思ひました。もとより信仰のない前のことですから、信仰といふことが心の親を得るのであるといふやうな、ハツキリした考へはなく、たゞ信仰に入れば家庭が平和になるといふ話を、ウス／＼聞いて居ま

したので、家庭の平和、子供の教育等が目的で、信仰を求めるといふ心が起りました。而も私自身の煩悶を信仰によつて解決したいといふ考へは出なかつたのであります。

私が信仰を求めるに思つて居る時に、丁度米國の觀光團が別府にやつて來られて、松濤館といふ劇場で演説がありました。其團隊は基督教の日曜學校の大會に出かける途中であるといふから、屹度信仰上有益な話があるだらうと思つて、私も聞きにまゐりました。其時の演説の要點は、つまり文明の花は信仰の根底があつて初めて咲くのである。信仰を求めるには基督教の日曜學校に行け、といふのでありました。それで私は佛教は未來のことのみを説くので、此人生には何の光明も放たないであらうが、基督教ならば必ず私の理想に適合した宗教であらう。何でも新らしいもので、殊に西洋から來た文明人の信する宗教に限るといふ考へで、一度其日曜學校を訪ねて見たいものであると思つて居ました。私がさう思つて居る處に、或日兄から一通の手紙が來ました。若し此手紙が來なかつたならば、或は基督教の方に入つて居つたかも知れないのですが、

にするといふ信者ならば、佛教も此人生に生きて働くのであらうか。それでは養家との關係を頼むか、否かといふことは第二として、兎も角一度面會したいと思つて、渡邊氏に紹介を頼みました。數日の後所謂信者といふ人に面會して、養家との關係を残らす打あけて話しました。同氏は養家に交渉して呉れましたが、ヤハリ時機をまつより外に仕方はなかつたのであります。夫から其信者の人は私に信仰の必要なこと、お慈悲の難有いことを説いて聞かせてくれましたが、一向私にはわかりません。どうすれば佛様が難有くなりますかと申せば、お寺に再三おまゐりすれば、自然とおわかりになりますと言ひますから、私はお寺まゐりは、何となく陰氣なやうで、心が進まなかつたけれども、マーむまゐつて居つたらわかるだらう位の考で、兎に角お寺まゐりをすることに決めました。其時西法寺に日曜講話がありましたから、毎度かへさずまゐつて熱心に聞きまいたけれども、どうも善いお話をあるといふ處まではまゐりますが、まだハツキリわかりません。其後僧侶のお方に逢つて直接お話を承つて、どうやら光明を認めたやうになりまいたけれども、まだ大安心

といふ處にはゆかなかつた。夫から清澤氏の精神講話といふ本を讀んだり、天本梅可氏の演説を聞いたりして、非常に感動はしましたが、まだ充分慈光が徹底するまでには至らなかつた。(入信の困難であつたことをお話すれば長くなるから略します)

而して居るうちに西法寺の佛教夏季講習會に、近角先生が來られて、人生問題及歎異鈔に就いての御講演をお聞かせにあづかることができて、初めて大悲の恩召に満腹させて頂きました。私は實にこの講習會で、久遠劫からおまちかねの親様に出逢せて頂いたのであります。私が以上申述べた人生問題に苦んで居る際に、先生にお出逢ひして、而も人生問題及歎異鈔といふ御講演をお聞かせにあづかつたと申せば、先生の御教化によつて入信されたお方は、私の信仰が略おわかりになることゝ思ひます。先生は私の人生問題をつり出して、これに解決を與へて下さつた。歎異鈔といふ銘刀をもつて、煩惱の賊を追ひ拂つて、私を光明界中に救ひ下さつたのであります。

す。さて其手紙の意味は大工の棟梁をして居る渡邊某といふものが、病氣で別府に入湯して居るから、自分の代理として見舞に行けといふのであります。私は病人が大工の棟梁であるから、建築上の智識を得ることもありう、又一つには自分の廣告にもならうかと、つまり慾望がさきにたつて、其病人を見舞ひました。而して話が建築上のことになりました處が、私にも新築をしては如何と渡邊が言はれました。私は無論お金がないから、新築どころではない、おまけに養家との關係は以上お話を通りであるから、其事を渡邊氏に打明けて話しました。爾うすると渡邊氏が、貴下は平和的に交渉して貰うお考へでも、護辯士に御依頼になれば屹度御養家の感情を害します。私の知るべに佛教信者との關係は、屹度うまく解決がつきますといふのであります。私は信仰を求めるといつて居る時でしたから、佛教信者といふことが心に響いて、これは一つ信仰上の話も聞いて見たい。自分は之まで佛教は、葬式道具位に考へて居つたけれども、人の世話などを熱心

時は大正貳年の夏、西法寺本堂の左側に、黒板とテーブルが置かれてある。高徳圓滿なる先生は、お念佛を稱へながら檀上にお出ましになられた。何處からとなく光りが先生のお衣を斜に照して、自然に莊嚴の状を感じられました。昔板敷山の辨闘といふ悪人が、御開山にお逢ひした時、聖人に光明がさしたといふが、さうありさうなこと、おもはれます。一方は罪惡の塊りである。夫から見れば他方は大慈悲の眞善美の極であるから、光明がさすやうに見ゆるのも、成程とももはれます。さて私は先生のお話を一句も聞きもらさぬやうに、熱心に拜聴して居ますと、一々が全く私自個の問題をお話になつて居られるのであります。私は今お話の順序などは記憶して居ませんが、人生は何處まで五分五分である。こちらが善くすれば相手も善くする、こちらが不實に出れば相手も亦不實に出る。然るにこちらは何處まで善くしたい、眞實にしたいと思うても、相手がそれを受けてくれない場合は、もう駄目となる。つまり相手の不實をうちまかすだけの眞實はない。故に人生は何處まで相對的である、人生は皆それで苦しんで居るといふお話であつたが、私も

實に其通りであつた。自分は善くして居るのに、養家は一向構うて呉れない。師長に對しては濟まぬことができた。妻に對しては自分の考へはよいが、妻はいけないのでといふ、つまり五分五分の考へより外はない。然るに今佛の思召は、汝としては父母孝養もできない、奉事師長も出來ない、其他戒定惠の三學も及ばない、善くなりたい／＼で善くなれん汝が見捨てられぬ爲めに、此親がわざ／＼成就した名號六字である。故にこの南無阿彌陀佛一つを受けて呉れよとある親様の御思召であつた「圓滿德號勸專稱」此時先生は黒板の上下に線を引かれて、上の絶對界から下の相對界に下るところの線を、南無阿彌陀佛となされたり、コップの水を名號六字の妙藥におたとへになつたりして、いと胸には何時となく、大悲の暖かいお思召が入りみちて下されたのであります。其時の感想、即よろこびを、大正貳年の九月に書きました終りに——御講演をお聞かせにあづかつて、いよ／＼金剛の信心を頂き大安心大満足、大喜悅、その他何とも申様のない楽しい生活に入ることができました。——と記してあります。

其他先生は「信仰は今日の無事をよろこぶことでない」といふこと、及信仰の上にも律法主義（努力主義）と退要主義（自然主義）のあることを、懇切に御説き下さいまして、何處までも善くしなければならぬといふ方は律法主義、悪いまゝでよいといふ方は退要主義で、どちらも絶對の光が見えて居ないといふ御教化であつた。就中退要主義を諷められて、佛は悪い私をお助けてあると、まるで佛が悪い私を助けるのは、あたり前のように思つて居るから、トングことになる。それは悪い私と佛のお思召とが出違ひになつて居る。（此時先生は扇子で仕方をなされた）それではお慈悲を難有いと思ひながら、悪いことはやまない。これがマーカー一般的の信者に多いやうである。佛のお慈悲はお慈悲、悪いことは悪いこと、別にして居るから大間違ひになる。悪うても大事ない、悪うてもお助け、それではいけない。お慈悲の頂きやうがまるで違つて居る。此助かりやうのない罪惡深重煩惱熾盛の私を、お見捨てなくそれが可愛さうであるといふ佛のやるせないお思召一つを、よく頂かなくてはならぬ。イツレノ行ニテモ生死ヲハナル、コトアルベカラサルヲアワレミタマ

イテ、願ヲオコシタマフ本意を頂けとのお話である。それからおたとへに、天災地變の時に、陛下の御禱をあたり前のやうに思つて居るのは、大變な間違ひであると同時に、其お恵を遠慮して、お受けしないのはまたお思召にそむくわけになる。佛のお慈悲に對しても、それと同じことであるといふやうな御教化を頂きました。私は最早佛の誓願不思議を信ぜざるを得なかつた。彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせ、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさ（歎異鈔）せて頂くことになりました。善ければ採る、悪ければ捨てるといふのが世間の常であるのに、佛は私の善くなれん、惡のやまぬこと、五分五分で苦しみつゝある仕て見やうのなてしろしめして、それをあはれとある廣大のお慈悲にてまします、善くなりたくても善くならぬ罪業の私。人生に於てます／＼冷却されつゝある仕て見やうのない私を、お見捨てない爲めの御本願——サレバソクバクノ業ヲモチケル身ニテアリケルヲ、タスケントオボシメシタチケル本願ノカタシケナサヨ（歎異鈔）——と頂かせて貰うの外はなかつた。

其後は不思議にも今まで苦しんで居つた問題が自然

と解けてしまひました。即ち養家に對する註文がなくなりつてしまつた。私は寧ろ養家に對して物質的の慾望をもつて居つたのがお耻かしい、否馬鹿／＼しくなりました。相續權といふやうなつまらぬものに執着して居つた夢がさめてしまひました。之ましては時機の來るまで諦らめて居るといふ方があつたが、今はそんな考へもなく、一點の曇りもないことになつた。それから師長に對して濟まなかつたことを苦にして居つたのも、罪業深き汝故に見捨てぬ。——タトイ罪業は深重なりとも、必ず救ふとある廣大のお思召に満足させて頂き、よきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらする(數異鈔)ことになりました。——自力作善ノヒトハヒトヘニ他力ヲタノムコヽロカケタルアイダ、彌陀ノ本願ニアラズ、乃至イツレノ行ニテモ生死ヲハナルヽコトアルベカラサルヲアワレミタマヒテ、願ヲオコシタマフ本意惡人成佛ノタメナレバ、他力ヲタノミタテマツル惡人モトモ往生ノ正因(歎異鈔)であるぞとのお慈悲には、たゞ／＼感泣嗚咽の涙あるばかり、思へば之まで永い煩惱懊惱して來たことも、今日では實に意義あることになつたの

と解けてしまひました。即ち養家に對する註文がなくなりつてしまつた。私は寧ろ養家に對して物質的の慾望をもつて居つたのがお耻かしい、否馬鹿／＼しくなりました。相續權といふやうなつまらぬものに執着して居つた夢がさめてしまひました。之ましては時機の來るまで諦らめて居るといふ方があつたが、今はそんな考へもなく、一點の曇りもないことになつた。それから師長に對して濟まなかつたことを苦にして居つたのも、罪業深き汝故に見捨てぬ。——タトイ罪業は深重なりとも、必ず救ふとある廣大のお思召に満足させて頂き、よきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらする(數異鈔)ことになりました。——自力作善ノヒトハヒトヘニ他力ヲタノムコヽロカケタルアイダ、彌陀ノ本願ニアラズ、乃至イツレノ行ニテモ生死ヲハナルヽコトアルベカラサルヲアワレミタマヒテ、願ヲオコシタマフ本意惡人成佛ノタメナレバ、他力ヲタノミタテマツル惡人モトモ往生ノ正因(歎異鈔)であるぞとのお慈悲には、たゞ／＼感泣嗚咽の涙あるばかり、思へば之まで永い煩惱懊惱して來たことも、今日では實に意義あることになつたの

て涅槃の妙境を實驗させて頂くことになり、寝ても南無阿彌陀佛、起きても南無阿彌陀佛のほかはないのであります。さて信仰の上から私の通つて來た煩惱の暗路を、ふりかへつて見ると、自然に人生が難有く味はあるゝと同時に、同じく煩惱の暗に迷つて居られる方があはれに思はれる。或は嫁姑、夫婦、親子等の關係(即家庭問題)に苦しんで居られる方や、或は病苦、或は生活難等種々様々の人生問題に苦しんで居られる。而して折角信仰といふ方面に氣附かれた方でも、現世の利益を交換的に要求して居られる向きが多い。又佛教の方に立ち入つても、單に佛を崇拜して居られる方もあれば、佛教に賛成して居られるまでの方がある。又所謂真宗信徒といふ内にも、佛の意に叶ふべく努力して居られる方もある。此まの助けてすまして居られる向きもある。さうかと思ふと、又或る方面では一種の道樂に法を聞いて、種々な理窟をならべて、彼れはれいふて居られる者もある。つまり實人生は皆な五分五分の争ひてあつて、絶對の光を認むることの出来ないあはれな状態である。就中私に最縁の近い方は病苦に悩み、或は生死岸頭にたつて居られる方である。

であります。

繰り返して申すやうですが、善ければ採る悪ければ捨てるは世間の常であるのに、悪くて困つて居る汝が特にあはれで捨てられんとあるのが、實に超世の本願こゝ一つを近角先生によつて、よく聞き聞かせて頂いたからは、今まで冷めたい人生の方面のみを見て居つた私が、あたゝかい大悲の方へネデ向かられて、たゞもう一切うちまかされてしまひ、善もほしからず惡もおそれはないといふ、樂な身にして頂きました「ことの葉にあげてかたらうすべぞなき深さしられぬ彌陀の思召をよろこばせて頂くばかりで、報土の往生がとげられるとは、何とした不思議、何とした仕合せであります。(ニヽロモコトバモタヘタレバ、不可思議尊ヲ歸命セヨ)」この罪惡深重の私が、大悲の思召をよろこばせて頂くばかりで、報土の往生がとげられるとは、何とした不思議、何とした仕合せであります。めぐみは(介)之れ以上口にも筆にもつくすることはでききないのであります。(ニヽロモコトバモタヘタレバ、「超世の悲願さゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にあそぶなり」「うれしさをむかしはそてにつゝみけりこよひは身にもあまりぬるかな」「不斷煩惱得涅槃」煩惱を断ぜずし

が、私は呼吸器病を専門として居る處から、重症の肺患者がよく來られる。従つて自然に其人々の煩惱懊惱が察せられて、たゞ一時の對症療法をしただけでは済まぬ氣がする。そこで柄にもない私が、人生と信仰の實驗をお話して、絶對者即佛陀を紹介しなくなる。ようしますと妙なもので、佛教の教理も知らず、素より其方の學問などチツトも心得て居ない私の、お話させて頂いたことで、非常に安心された方が數々あられました。兎も角先生の御講話によつて、私自身の問題が解決されたのみならず、自然に人様の問題にまで及ぼします。兎も角先生の御講話によつて、私自身の問題が解决され、大安心を與へて下さるといふのは、全く佛智不思議と申す外はないのです。「久遠劫ヨリコノ世マデ、アハレミマシマスシルシニハ、佛智不思議ニツケシメテ、善惡淨穢モナカリケリ。」南無阿彌陀佛。

歎異鈔講義

近角常觀

第十三章（續）

賢善精進の相を外に示して、内には虛假をいだけるものか

持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかで
か生死をはなるべきや。かゝるあさましき身も本願
にあひたてまつりてこそげにほこられさふらへ。され
ばとて身にそなへさらん惡業はよもつくられさふ
らはじものを。またうみかはに、あみをひき、つりを
して世をわたるものも、野やまにしゝをかり鳥をと
りていのちをつくともからも、あきなひをもし、田
畑をつくりてするひともたゞおなじことなり。さ
るべき業縁のもよほせはいかなるふるまひもすべし
とこそ聖人はおほせさふらひしに、當時は後世者ふ

りしてよからんものばかり念佛まうすべきやうにお
もひ、あるひは道場にはりふみをして、なむ／＼のこ
としたらんものをば道場へいるべからずなどとい
ふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、
うちには虛假をいだけるものが、願にほこりてつく
らん罪も宿業のもようすゆへなり、さればよきこと
も、あしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本
願をたのみまるらするをこそ他力にてはさふらへ。
聖人が藥あり毒を好むべからずと仰せられたは、藥
があるゆへに毒を好むてもよろしいといふて邪見に陷

ゐることを戒められたもので、少しでも毒を食ふたも
のに、藥を呑ませぬといふことではない、毒もない、病
氣もないものでなければ藥を飲むてならぬといふなら
ば、我等は病氣がなをり様はないではいか、如何と
も手をつけ様もないかる重病人も、此本願の妙藥を
いたゞいてこそ、其慈悲にほどだされて本復するのでは
ないか、かく云へば定めて毒を好んだり、病氣になつ
たりするであらうといふ懸念があるかもしれぬが、決
してさる心配は無用の極にて、誰が好むて病氣になる
ものか、よしんば御醫者にあまへ、藥にほどだされて、
毒を好むといふならば、夫も畢竟病氣の所爲といはね
ばならぬ、胃病患者がいかにとめられても菓子を食ひ
たい、飲酒家が一刻も飲まずには居られぬ、といふの
が既に中毒をして居るからである、願にほこりて作ら
ん罪も宿業のもようすゆへなり、ぢやから仕方がない
病氣ぢやから仕方がない、中毒ぢやから仕方がないと
いうて菓子を食ひ、酒を飲んでも勝手次第であるとい

ふ邪見に陥りてはならぬが、さればとて少しでも菓子
を食ひたい、酒飲みたいと思ふこともいかぬ、嚴格な
る戒律主義、律法主義を勵行してでなければ、此妙藥
を用ひてはならぬといふならば、藥を用ゐる時がなく
病氣のなほり様はないではいか、既に食ひたい飲み
たいが病氣のせいであり、中毒のせいであるのである
から、そこを察して呉れるが本願の名醫ではないか、
其病氣を何處までも見捨てずに世話するぞといふが看
護人の辛抱づよい所である、此様な名醫や看護人にほ
だされて、つい／＼病氣も本復するのである、食ひた
いと思ふてもいかぬ、飲みたいと考へるからわるい
の用もない、夫は病人の性分、病氣のせいであるが
百も二百ものみ込んで、どこ／＼までも治さんといふ
名醫や妙藥を信頼するのが他力ではないか、是がされ
ばよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、

ひとへに本願をたのみまわらするをこそ他力にてはさらべとの味である。

此章の書き方は放縱主義と律法主義の基の攻め合ひの様な有様がある、病氣を治す薬なれば、毒を喰ふものがたすかるのぢやとの教を聞きて、ぢやからわざと毒を食へと言ふ邪見な放縱主義が起る、夫に對して薬があればとて毒を食ふてはならぬと仰せらるれば、忽ち律法主義がそれみよ、毒を食ふてはならぬ、毒は薬の妨であると言はんとする、そこでさうではない、まつたく毒は薬の妨といふ意味ではない、持戒持律で食ひ飲みたいと思ふてさへわるいといふならば、我等とても致方がないではないか、と言ふ鹽梅に放縱主義は、惡は往生の業とまで主張し、律法主義はまたく惡は往生の妨である、持戒持律にてのみ本願を信すべしと主張して殆んど餘地ないごとくである、併下手な碁の攻め合である、下手な撃劍の渡り合である、其間に何れも十二分に隙がある、餘地がある、食ひたいか

ら食はん、飲みたいから飲まんといふ放縱主義と、飲みてはいかぬ、食ふてはいかぬといふ律法主義との間には、飲みたい、食ひたいが中毒のせいである、病氣のせいであるから、其様な心を止めてではない、考へてならぬではない、病氣の性分種々なれば、其飲みたい食ひたいといふ心持まで察してくれる、急所々々に手が届く醫者に遇ひてこそ信頼が出来るではないかといふ、本願の不思議にてたすけたまふといふ絶對救濟の主義を十二分に發揮してあるが此一段の文字である。

私自身が律法主義を脱する事が出来ずして、久しく苦しんだものゆへに、世の律法主義のために苦しめる人に對して、深きく同情を禁じ得ない次第である、或人が色々苦み煩めるとき之をなほさんといふ人が、かく思つてはならぬ、かく考へるからなほらぬ、といふ様に教訓を下されるので致方がないと言はれた、いかにも尤な次第である、人が苦悶煩悶するときに、夫が思

ふたり、思はなんだり出来る位ならば煩悶するものがいるのか、誰が好んで煩悶するものか、止めようと思ふても止められぬのが煩悶である、現に私自身の如きも他人に對して氣をおいたら、心を隔てたりして夫が止まぬが永々の苦みであつた、若し夫が止められるなればよいといふまでは分つて居れど、夫が止まぬのが神經衰弱のせいであつた、其所へ、其氣をおくこと、心を隔てるこの止まぬか病氣のせいなれば無理ないこと、察して呉れる人があらはれた、かく察して呉れる人なれば、私の性分として其人に對して如何に心を隔てゝも、如何に氣を置いても更に心を止めざるのみならず、却て私に對して心を隔てず、氣をあかすして、何處何處までも寛宏な態度をもつて向はれる、されども心を隔てたり、氣をあいたりする已上はあきれはて、其寛宏も寛容も遂には我を見限りしてらるゝであらう、いかに隔てぬ性分の人でも、かく、シツコク我が

隔てる性分をもて向ふときは、遂には先方をして隔てしむるに至るであらう、あきれはしてあらうと思うて、我が隔心の止まぬ間は安心は出來なんだ、しかるにどこくまで私の性分の止まぬことを承知して、如何なる點までも察して呉れる同情して呉れる、否汝が隔が止んだり、氣をおかぬ様になつたりする位ならば同情する必要はない、汝の隔意は止むものが、汝の隔意の止まぬ處が可哀想である、其點を察すればこそ何處にあらず、汝は勝手次第に心を隔てよ、我は夫に拘はらず此方よりは心を隔てぬのであるといふ様に言はれて、はじめて、ほんのりと心の隔てがとれてくるのである、此絶對に心を隔てぬのである、我等が氣をおきて居るのも融和さるゝのである、是が毫も爲さねばならぬ、爲してならぬの律法主義でなくして、寧ろ爲すことも出來ぬ

止めるこども出來ぬ心を察して下さる本願の不思議の親の膝にもたれ、光明の懷の中に安らかにいだかるのである、たとへば子供が泣きさけぶときに、叱れば叱るほど泣くごとくである、固より泣く兒のことなれば、どれ程泣きてもすかしなだめて呉れる親なればこそ安らかになるのである。

されど此に注意すべき微細微妙なる心の状態がある、どこ／＼までも察してやるなどなだめてやるぞ、どこ／＼までも同情してやるぞ、苦樂を共にしてやるぞ、汝の苦を抜き樂を與ふるまでは我獨り安んぜずといふ親の心をいたゞきて、初めて安んずることが出来るのである、是が眞の親の心である、たゞかく言うてくれたところが、夫が眞實でなければ決して安心出来るものではない、眞實の教が現代に徹底しないのはかく説くものだととなつて居るからである、眞にかくして呉れるが親である、かくすかし慰めて呉れる親が事實であるゆへに泣く兒も自然に慰められるのである、今我等も泣

たゞければ安心が出來るのであるといふことを、動かすれば煩惱が止むのである、といふた様に聞きとられることがある、泣くな／＼といふ間は止まぬが、其止まぬこゝろを察して呉れる親の前には泣が止むのであるといふならば、明らかに煩惱が止む様に感ぜられる、是大なる誤解の本となる、子供の泣の心底まで和げられたゆへ、子供が安心するのである、其結果泣きも一時は止むてあらうが、又泣き出すこともあらう、どれだけ泣出してもなだめてくれる親あればこそ、たとひ如何に泣こうが、親がなだめてくれるといふが親心である本願の不思議である、其親心をいたゞいて安心して、泣くも泣かぬも氣にならぬ様になつたが得涅槃である、得涅槃といふは煩惱が氣にならぬやうになつた心持である、さればこそうみかはにあみをひきつりをして世をわたるものも、野やまにしゝをかり、鳥をとりていのちをつくともがらも、あきなひをもし、田畠をつくりてくるひともたゞらなじことなり、さるべき

きごとを止めよ、止めねばならぬといふ持戒持律では泣きは止まぬのである、何處までも泣きを慰めてくれるゆへに安心が出来るのである、不斷煩惱得涅槃の味はこゝである、煩惱が斷ぜられぬといふことを佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せ下されたものゆへに、そこまで見て下さるか、同情して下さるかといふ様に心の底まで佛の御心が届いて下されたところで初めに安心が出来るのである、是がかゝるあさましさ身も本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへといふ味である、是が得涅槃の味である、勿論此世では涅槃は得られぬゆへに、得涅槃分と言うてある、涅槃は來世に得るとしても來世にて涅槃を得られるだけ、流轉生死の根ざしが出來たのである、此點を横超断四流といふのである、此不斷煩惱と断四流との關係が頗る注意すべき點である。

私なども、時としては言葉の言ひ廻はしによりて、煩惱を断ぜられぬことを知らしめして下さる御慈悲をい

業縁のもようせはいかなるふるまひもすべしとこそ聖人が仰せられた次第である、淨土真宗の在俗在家の有様にまかせて、持戒持律の律法主義を全く解脱してあるは此が根本である。

持戒持律なれば結構なれど、破戒無戒でもよろしいといふ様な教なれば、宗風とまではならぬのである。所謂真宗以外の宗旨が持戒持律が本義なれど、ほとんど事實に於ては破戒無律でありながら、併真宗の立場となることが出来ぬのである、何んとなれば根本主義が持戒持律で立てるのであるから、畢竟之を守らぬといふが放縱主義に陥りて居るといふに過ぎぬのであるから、夫ては安心の出来る筈はない、昨今の他宗の有様ならば、真宗と選ぶ事はないのではないかといふ人があるが、決して破戒無戒が真宗であるといふ事ではない、其代りに真宗の人も破戒無戒を特權であるかの如く考へて放縱に陥るならば、是こそ眞に他宗と撰ぶとはいひのである、親鸞聖人の時代的研究をする人が、砂石集

など引きて當時の破戒無戒を立證して、聖人は時代の產物であるかの如く論じて、之を誇とする人も辯護する人も片腹いたき事である、然らば如何なる點が此宗風の淵源であるかと言へば、聖人の眼中には持戒持律が本義でない、破戒無戒が本義ではない、持戒持律は煩惱具足の我等には出來得ないのである、聖人が化身土の卷に末法燈明記を引き給ひたが是である、末世に於て眞に持戒の人ありと言はゞ、是市に虎あらんが如してある、全體持戒持律が出來ると思うて居るが大なる間違である、茲に如來の選擇本願は、末法の世に持戒持律の成す可らざるを憐みたまひて、願を起したまふ本意偏に破戒無戒の者の爲である、此選擇本願が本義である、然るに持戒持律を以て本義とする聖道門は不可能である、不可能であるから破戒無戒を本義とするといふ放縱主義では成立ない、其破戒無戒をかねてしろしめして、其ものをたすけんが爲の五劫思惟の本願である永劫の修行である、如何に我より隔てるも其もの

てあせるのも、畢竟定散自力の信心である、是懈慢界に墮するものである、如來の光明に接觸せざる舍華末出の信心である、佛智不思議に夜が明けぬのである、是が即ち如來の智慧海の不思議に歸入せぬのである、此無限大悲の如來の光明に接觸せずして、冥想的に理想的に憧憬するものは皆定散心である、律法主義である、是が化身土卷に出て、ある機類である、邪定聚及不定聚は彼因を建立したまへる事を了知することあたはざるがゆへに、破戒無戒罪惡深重のものをたすけんがために建立したまひたるが選擇本願である、持戒持律の爲し得ざることを憐みたまふが大悲の源である、真宗紹隆の太祖聖人特に宗の淵源を盡し、教の理致をきはめて凡夫直入の真心を決定したまひたとあるが、實に此彼因を建立したまひし佛智不思議を了知せられたのである、此他力攝生の旨趣といふのが歎異鈔に所謂本願

他力の意趣である、世の人づねに以爲く、惡人なほ往生すいかにいはんや善人をやと、此條一旦其いはれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり、煩惱具足の我等は何れの行にても生死をはなるゝ事ある可らざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意ひとへに惡人成佛のためである、此他力攝生の旨趣を受得して、其他力をたのみたてまつる惡人最も往生の正因である、しかるに其他力不思議をいたゞかずして、猶持戒持律を以て進まんとする者は疑心の善人である、之を化身土卷に誠められるのである、故に化身土卷に末法燈明記を引きて、末世に於て持戒持律にて出來得ざる事の氣任にするといふのではない、我等が持戒持律の出来得ざる事をしろしめし下されたが、五劫思惟の願は佛かねてしろしめして、市に虎あらんが如しと仰せられたのである、破戒無戒てよしと放縱に流れて自分の氣任にするといふのではない、我等が持戒持律の出来得ざる事をしろしめし下されたが、五劫思惟の願は親鸞一人が爲なりけりと、佛のかねてしろしめし下さる如來の本願に隨順するのである、信順するのである、

相應するのである、夫故我こそと大びらきつて破戒無戒にするのではない、破戒無戒の悪人なり、煩惱具足の凡夫なり、不斷煩惱のとても隔ての止まぬものである。と廻心懺悔が出来るのである、そくばくの業をもちける身にてありけるをと仰せられたが是である、愚禿親鸞と仰せられたが是である、愧づべし傷むべしと仰せられたが是である、機の深信が起るのである、罪惡觀が起るのである、是がかゝるあさましさ身である、此不斷煩惱たるあさましさ身をしろしめして下さるが一向專修、選擇本願の大行である、さればこそ諸の善法を攝し諸の德本を具して極速圓滿して下さる、真如一實の功德寶海の南無阿彌陀佛である、本願力にあひねれば、むなしくすぐる人ぞなき、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし、かゝるあさましさ身も本願にあひたてまつりてこそげにほこられ候へ、是が得涅槃である、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、さらに往生すまじや否やの心配がないのである、氣が

態度を云々する代りに、早く其物を與へて呉れた精神、馳走をして呉れた本意を明らかにするに如くはない、汝が空腹なるを察して汝に満腹せしめんために與へたのである、汝が嗜好を察して、最も適當なる品物を與へたのであると言はれたるとき其深き親切、念を入れたる品物たる事を頂きたるときは、如何に澤山に貰ひたりとて敢て横着といふ譯もなく、如何に少ししか食する事が出來ずとも、十二分に御親切に満足したのである、敢て遠慮でもないのである、此深き御眞質が選擇本願である、本願眞質である、遠慮するなと言はずとも、遠慮がとれるのである、横着心も自から心を廻して深き御心をいたゞくのである、今も持戒持律でなくてはならぬといふ様な遠慮はどうしてとれるかと言へば、さるべき業縁の催せは如何なるふるまひをもすべしとまで、察して下された御眞質でとれるのである、かゝるがとれたらば定めて横着になるかと言へば決して左様ではない、さればとて身にそなへざらん惡業はよもつかれ候はじものを、其代りにたとひ惡業を作らぬか

よりがないのである、愛欲も名利も皆煩惱なり、されば氣のあつかひは雜修なりと仰せられたが、實に煩惱の水解けて功德の水となる本願圓頓一乘の味である。此の如く持戒持律の律法主義ではなく、破戒無戒の放縱主義にも非ずして、選擇本願の罪惡救濟の絕對第一義乗によりてたすけられるのである、私が律法主義でもない、放縱主義でもないといふ言を繰返すものであるゆへに、或人が然らば如何にせよと言はるゝのか、甚だ困りましたと述懐せられたのを聞きて、如何にも惡るかつたと大に其人に同情したことであつた、全體はいかぬと云ふならば、一體どうしたらばよいのか分からぬ、いかぬ／＼と言はるゝと一種の律法主義に聞きとれる、信仰を得ねばならぬ、徹底せねばならぬといふとはも律法主義に聞こえる、物を取らうとすれば横着ぢやと叱り、控めれば遠慮ぢやといふ、一體どうしたらばよいか分からぬ、横着するな遠慮するなどいふ言語を繰返すばかりでは横着も遠慮も止まぬ、其場合此方の

ら、我こそ善人なりと思ふならば夫こそ大間違である、罪惡を自覺せざる疑心の善人である、我こそ持戒持律が出來る様な顔をして、何々の事したたらんものは道場へ入るべからずなど、いふのは、外に賢善精進の相を現して内には虛假不實を懷ける雜善主義である、雜毒主義である、偽善主義である、聖人が善導大師の至誠心釋に訓點を施して、外に賢善精進の相を現すことを心得ざれ、内に虛假を懷ければ也と仰せられたが、實に如來利他眞質の絶對救濟の一義を示されたのである、此に於て在家在俗の有様にて唯誓願一佛乗に歸命する淨土真宗の宗風が起りるのである、是聖德太子の引導によりて親鸞聖人が、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂の信仰的家庭を實現せられたる淵源である、雜行をすてねばならぬとか、たのまねばならぬとか言へば、是が兎角律法主義に聞こえて間違安いのである、本願雜行雜善を廻へるのである、内懷虛假の愛欲名利を慚愧して、而も機のあつかひがないのである、實に善もほしからず、また惡もおそれなしと仰せられたが實に聖人御自督の極である。

第六回 夏季求道會

六〇

時日 七月二日ヨリ九日マデ八日間

毎朝午前八時ヨリ 講話

每夕午後七時ヨリ 信仰談話會

講題一、親鸞聖人御作「教行信證」行卷
人生問題

近角常觀

殊に本年は新會館に於ける最初の講演會として、充分徹底的に法味讚仰の希望に候。奮つて御來會願上候也。

追て地方より御來會下さる方の爲には、宿泊の儀充分便利に御心配可申上候に付前以て御申込
被下度候

(來聽隨意) 本鄉區森川町壹番地
電話下谷一二四一一番

求道會館

求道會館設立會計決算報告

入之部

總金額貳萬壹千六百四圓九拾七錢也

内 譯

寄附現金受領額

一壹萬九千五百八圓五拾九錢也

寄附現金銀行預置利子合計

一壹千七百五拾七圓拾錢也

大正元年家屋取毀已前家賃
二部地代を支拂ひたる残額

一參百參拾九圓貳拾八錢也

出之部

總金額貳萬六千九百八圓七拾七錢也

内 譯

一貳 千 四 百 圓 也

明治三十六年十一月第一回敷地地上權占有的爲家屋購入費

同上に付借入金に對する明治四十一年六月までの利子合計

一五百七拾貳圓八拾壹錢也
一五百七拾圓七拾六錢也

(貳) 百 圓 也

(參) 參百七拾圓七拾六錢也

一七百六拾參圓四拾貳錢也

(參) 參百 圓 也

(六) 六拾 圓 也

(八) 八拾 圓 也

(貳) 貳百五拾 圓 也

一參千壹百參拾貳圓九拾貳錢也

一壹 百 五 拾 圓 也

一壹 萬 四 千 圓 也

工 事 費

御本尊御禮金
第一回設計製圖料
第二回設計製圖料
工事準備家屋移動費半額支出
水道等起工費

大正四年起工の時、第二回敷地地上權占有のため家屋購入費、並に其模様變賠償金、有

右支拂金一部借入利子

追加工事費
右支拂金一部借入利子
上棟式費
備付品
電話架設費
電燈工事費及器具
經師屋支拂
六角堂御障子
ステンドグラス

一壹千參百五拾壹圓七拾錢也
一壹百參拾四圓參拾四錢也
一壹百六拾壹圓參拾參錢也
一九百拾七圓五拾七錢也
(貳) 貳百 圓 也
壹百拾圓九拾錢也
八拾 參 圓 也
七拾壹圓拾錢也
五拾五圓八拾七錢也
參拾八圓五拾錢也
六拾圓或拾四錢也
拾參圓七拾七錢也
拾四圓六拾錢也

下足札
雜機等
磬石謝禮
置ストーブ及器具
経機
三

(五拾參圓五拾錢也)

上草履八百足

一參百五拾九圓六拾參錢也

落慶式紀念品

一參百參拾四圓八拾錢也

落慶式費

五拾圓四拾五錢也

雜誌紀念號增刷費

四拾圓八拾參錢也

招待狀、禮讀文、十七憲法其他印刷費

四拾圓七拾參錢也

招待狀印稅、用紙類

七拾參圓四拾九錢也

臨時假設物及裝飾費

六拾六圓參錢也

接待費、慰勞費等

貳拾七圓貳拾七錢也

諸祝儀費

參拾六圓也

御禮金

一五百參拾圓也

工事監督費、賞與金等

一貳百貳拾參圓拾錢也

建築中諸種慰勞金、及夜業臨時手當等

一壹百拾九圓六拾九錢也

諸種公納金、保險料、電氣瓦斯代等

一四拾七圓八拾八錢也

其後の雜誌報告費

差引

金五千參百參圓八拾錢也 不足總額

内但し

金壹千壹百貳拾五圓參拾錢也 申込未納額

右決算御報告申上候。就ては前記不足額可相成速に補充仕度候間、何卒引續き御喜捨を仰ぎ度奉願上候。猶御申込の上未納の御方は、何分此際納付なし被下度奉希上候也。

大正五年五月十日

世話人總代 長尾 收一
會計監督 西澤 善七

一壹百七拾四圓貳拾錢也

莊嚴費、雇人使用料其他諸經費

一九百六拾四圓六拾貳錢也

地代一部補助

求道會館建築寄附金第十五回報告

(四月
デ初)

一金壹百圓也	府下	岩田 啓子殿	一金拾圓也	巢鴨 原子 廣宜殿
一金五拾六圓也(第一、二回)	山口 富田勇吉殿	一金拾圓也	本郷 鯉江つね子殿	
一金五拾圓也(第二回)福岡峠延吉殿	片野 鐵次郎殿	一金九圓也(第二、三回)本郷古崎彊殿	谷川 米太郎殿	
一金五拾圓也(第二回)新潟齋藤らく殿	一金八圓也(第二、三回)熊本前田すま子殿	一金五圓也	伯耆無名氏殿	
一金貳拾圓也(第二回)	坂倉眞直殿	一金五圓也		

一金貳拾圓也	府下	本多辰次郎殿	一金五圓也	大阪	川村	貞治殿
一金貳拾圓也(第四回)	横濱	前田清次郎殿	一金五圓也(第四回)	福岡	上田定次郎殿	府下
一金拾圓也	本郷	清岡 博見殿	一金五圓也(第二回)	同	麻生	介殿
一金拾圓也(第三回)	熊本	吉村 和七殿	一金五圓也(第四回)	熊本	無名	氏殿
一金拾圓也(第二回)	山形	小田切信幸殿	一金五圓也	同	中原	平吉殿
一金拾圓也(第一、二回)	福山	葛原運次郎殿	一金五圓也	山形	遠藤	とし子殿
一金拾圓也(第四回)	芝	樺島 章子殿	一金五圓也	府下	太田	七造殿

一金五圓也(第三回)	金澤	鈴木忠左衛門殿	一金貳圓也(第二回)	金澤	櫛田きん子殿	一金貳圓也(第二回)	小笠原	若松	福島	長藏殿
一金五圓也	伊勢	麻布	一金貳圓也	伊勢	越前	本谷	一金貳圓也	新潟	淺草	森脇
一金五圓也	勢乾	本布	一金貳圓也	勢乾	福井	暢音殿	一金貳圓也	鹿兒島	原寅治	忠市殿
一金五圓也	資尙	本谷	一金參圓也	資尙	東京	大谷	一金貳圓也	阿部津右衛門殿	敬孝	寅治殿
一金五圓也	尙殿	暢音殿	一金參圓也	尙殿	福井	柴田	一金貳圓也	渡邊	三井誠之進	忠市殿
一金四圓也	伊勢	本布	一金參圓也	伊勢	神田	松崎	一金貳圓也	安治	原寅治	寅治殿
一金四圓也	勢乾	本谷	一金參圓也	勢乾	住田	純雄殿	一金貳圓也	新潟	小山孝之丞	忠市殿
一金四圓也	資尙	暢音殿	一金參圓也	資尙	大阪	利八殿	一金貳圓也	阿部津右衛門殿	敬孝	忠市殿
一金四圓也	尙殿	伊勢	一金參圓也	尙殿	青本	淳代殿	一金貳圓也	渡邊	三井誠之進	寅治殿
一金四圓也	伊勢	勢乾	一金參圓也	伊勢	本府	根岸しげ子殿	一金貳圓也	新潟	鹿兒島	忠市殿
一金四圓也	勢乾	資尙	一金參圓也	勢乾	下山	鈴木千代子殿	一金壹圓五拾錢也	阿部津右衛門殿	新潟	忠市殿
一金四圓也	資尙	尙殿	一金參圓也	資尙	阪南	大賀	一金壹圓五拾錢也	渡邊	小山孝之丞	寅治殿
一金四圓也	尙殿	伊勢	一金參圓也	尙殿	莊南	淳代殿	一金壹圓五拾錢也	誓海殿	敬孝	忠市殿
一金貳圓也(第二回)	芝	渡邊	一金貳圓也	芝	庄南	根岸しげ子殿	一金壹圓五拾錢也	會殿	新潟	忠市殿
一金貳圓也	石崎	順吉殿	一金貳圓也	石崎	莊南	鈴木千代子殿	一金壹圓五拾錢也	藤川殿	鹿兒島	忠市殿
一金貳圓也	小山	萬吉殿	一金貳圓也	小山	莊南	大賀	一金壹圓五拾錢也	本鄉	新潟	忠市殿
一金貳圓也(第二回)	小石川	渡邊	一金貳圓也	小石川	莊南	淳代殿	一金壹圓五拾錢也	藤川殿	鹿兒島	忠市殿
一金貳圓也	渡邊	順吉殿	一金貳圓也	渡邊	莊南	根岸しげ子殿	一金壹圓五拾錢也	本鄉	新潟	忠市殿
一金貳圓也	順吉殿	萬吉殿	一金貳圓也	順吉殿	莊南	鈴木千代子殿	一金壹圓五拾錢也	渡邊	新潟	忠市殿
一金貳圓也	萬吉殿	萬吉殿	一金貳圓也	萬吉殿	莊南	大賀	一金壹圓五拾錢也	誓海殿	鹿兒島	忠市殿
一金貳圓也(第二回)	滋賀	廣島	一金壹圓也	滋賀	莊南	淳代殿	一金壹圓五拾錢也	會殿	新潟	忠市殿
一金貳圓也	廣島	吉原	一金壹圓也	廣島	莊南	鈴木千代子殿	一金壹圓五拾錢也	藤川殿	鹿兒島	忠市殿
一金貳圓也	吉原	光一殿	一金壹圓也	吉原	莊南	大賀	一金壹圓五拾錢也	本鄉	新潟	忠市殿
一金貳圓也	光一殿	會殿	一金壹圓也	光一殿	莊南	淳代殿	一金壹圓五拾錢也	藤川殿	鹿兒島	忠市殿
一金壹圓也(第三回)	牛込	膽吹	一金壹圓也(第二回)	牛込	莊南	鈴木千代子殿	一金壹圓五拾錢也	會殿	新潟	忠市殿
一金壹圓也	本多	豐丸殿	一金壹圓也(第二回)	本多	莊南	大賀	一金壹圓五拾錢也	藤川殿	鹿兒島	忠市殿
一金壹圓也	清安殿	長野	一金壹圓也	清安殿	莊南	鈴木千代子殿	一金壹圓五拾錢也	會殿	新潟	忠市殿

講 話

毎 每
土 曜 日 嘴 午 前 九 時
午 後 二 時

第一求道會
（木鄉區森川町一番地）

每月二十日午後七時

第二求道會
（九段坂佛教俱樂部）

第三求道會
（日本橋鰯谷町佛教所）